

愛媛県における I ターン者の実像

—— 対話式調査法及び主観的分析法の適用 ——

垂水 亜紀*

The actual conditions of new residents in Ehime prefecture

—— Application of research method with dialogue and subjective analysis ——

Aki TARUMI*

1. は じ め に

過疎・過密問題が生じてから30年あまりになるが、都市と農山村との人口格差は、数々の研究や政策的対応にもかかわらず拡大の一途を辿っている。しかし、近年、農山村に移り住みたいという都市住民の欲求は確実に存在し、すでにそれを実現している例も各地で見られる。研究面では、これまで新規就農者・新規林業労働者、Uターン者については数多くの実態分析が行われてきたが、最も定着が困難といわれる I ターン者については、ほとんど成果をもたない。その第1の理由は、市町村行政レベルでの I ターン者把握に大きな差がみられることである。つまり、過疎化の進行にさほど危機感を持たず、また I ターン者に対して不信感をいだいている自治体では、彼らに対する定住促進施策を積極的に打たず、情報も掌握できていない。そのため、研究に必要な情報の収集が困難な場合がある。第2に、仮に I ターン者の把握が可能であっても、数量的な調査が可能なほど I ターン者が居住している地域はごく限られている。第3に、したがって、I ターン者調査の明確な枠組みを設定するのが困難なためである。

本報告では、愛媛県内の過疎中山間地域に居住する I ターン者を対象に、平成9年度に行った調査・分析方法の枠組み並びにその適用結果を提示する¹⁾。

2. 研究方法の枠組み

(1) 対話式調査法

調査は事前に役場等で対象者である I ターン者の情報を得た後、本人に了承をとり、訪問の上、面

* 森林政策研究室 Laboratory of Forest Policy

接方式により行った。この調査では調査票を使用せず、共通の質問項目は属性、移住前の生活、移住の動機・きっかけ、移住後の生活の4項目とし、それ以外の質問については対象者との対話の流れに沿って変化させた。このことで、対象者の生活や価値観がよりリアルに表現される。また、その場での話から連鎖的に多くの情報が調査者に提供される。この対話重視型の調査法は、長時間対象者と接し、人間関係の構築が可能なため、再調査も比較的容易に行うことができる。この調査は、学生・院生という立場で調査を行いながら対象者から学んでいくプロセスとして、最適である（この調査法を以下では、対話式調査法という）。

対話式調査法の特徴をより具体的に述べていく。

① 調査票（質問紙）を用いない

調査対象者は多様な価値観をもち、また各人の移住状況も様々である。彼らの個別性を重視するには、調査項目は大まかであっても、調査対象者との自由な語らいが多く、多くの情報を引き出す最良の方法と思われる。調査票による聞き取り調査は、こちらが聞き出したい項目をまんべんなく聞き取ることは適しているが、彼らの本心や項目以外の大きな意味を持った言動は捉えがたい。また、調査対象者に与える印象も、項目に沿って聞き出すよりも、話の流れに沿っての問いかけの方が自然であり、より実感のこもった内容の回答を得られるのである。

② 調査場所

調査は、対話ができるような状況であればどのような場所でも行う。調査対象者がリラックスして話をできることが最も重要である。対話は世帯主に限らず、配偶者や子供等、他の世帯員とも可能な限り行うのが望ましい。

③ 調査時間

調査対象者の忙しさによって左右されるが、平均で1時間から2時間は要する。調査の質を高めるためには、1時間以上は必要である。短時間では、対象者が抱えるいろいろな不満や本心を引き出すまでには至らない。ただ、不満から話し始める対象者については、余程不満が強いのか、調査慣れしていて話が誇張気味である可能性も高く、注意が必要である。どうしても時間がとれない場合には、再調査できるまでの人間関係を作れるよう努めることが大切である。

④ 記述式

質問や対話の内容は、可能な限り記録しておく。調査対象者の応答の意図が明確になるし、のちに各調査結果を照らし合わせた時点で、ほんの些細な事柄が共通性をもった重要な項目として浮上してくる可能性を持つからである。

⑤ 対象者に対して主体的に関わらない

社会調査法の中には、対象者と活動、生活や作業をともにしたり、なんらかの働きかけを行ったりしながら調査を進めていく方法もあるが、対話式調査法では、あくまでも対象者の応答の内容や提示される資料を、記録として残し、分析するのみである。そのことによって、一定の距離を保ち、客観視できる状況にしておく。

⑥ 密着型

この調査法は、対象者の本心と思われる言葉を引き出すことが主眼である。そのため、彼らのおかれている状況や言動を、すべて観察し記録していく観察型というよりも、むしろ対象者の言葉に敏感に感應し、対話を深め広げながら対象者の状況を把握し、記録する、いわば密着型の方式といえる。

このような内容を持った対話式調査法の類似手法として、ライフヒストリー調査法（生活史法）が

ある。ライフヒストリーとは、「ある個人の生活の過去から現在にいたるまでの記録」²⁾である。その方法の根幹を成すのは、「インタビューを通して語られる口述の自伝的語り」³⁾である。聞き手との関係によって、語り手である調査対象者のストーリーは影響を受けることから、彼らの語りは「ライフストーリー」と表現されている。

ライフヒストリー調査法は、1920年代に、文化人類学者が異文化の人々やネイティブ・アメリカンを対象に行った聞き取り調査に始まるという。社会学でも、シカゴ学派が都市に住む移民や非行少年などを対象にした都市研究において使用した手法であり、この調査法がとられる場合は「少数民族、植民地支配下の諸民族、下層民、被差別民、女性など権力や富から遠いマイノリティが対象」⁴⁾となることが多い。なぜそうなるのか。それは、「調査者の生きてきた社会での価値観や世界観にとらわれず、多種多様な価値観を持って生きる人びとの存在を知り、その意味世界に接近しながら理解しようとすることによって、はじめて異文化やインフォーマル文化がみえてくる」⁵⁾ためである。

本論で研究対象としているIターン者も、日本社会の中ではいわばマイノリティである。ただ、彼らは「権力や富から遠い」というよりも、それらを否定すべく移住した、確信的マイノリティといえるかもしれない。また、Iターン者と調査者との文化的相違は「異文化」というほど大きなものではなく、一個人に対してそれほど膨大な時間を費やす必要もない。むしろ、調査対象者数を増やすことによって、Iターン者という社会的集団の性格や意向を的確に捉え、政策的な対応に確実に結びつける必要がある。対話式調査方法は、そうした要求に適合的な方法である。

(2) 主観的分析法

ライフヒストリー調査法が用いられる研究には、「語りによって事実を検証していこう」とする「実証主義的」なタイプと、「語られた言葉とその文脈に強い関心を持ち、語り手をなんらかの形で解釈しようとする」タイプの二種類がある⁶⁾。対話式調査法の特徴は、①と⑥で述べたように、この調査法も調査者と調査対象者の関係に大きく左右されるものであり、タイプの的には後者に近い。ただ、それは研究の全体からみれば、ある面で初期的な過程ともいえ、解釈タイプの調査から得た結果に基づいて新たな調査項目、仮説を設計していくという点では、実証タイプの性格も有している。

ところで、研究目的を達成する上で、調査法と分析法とは一体のものであり、またそれらは、適合的、親和的でなければならない。その意味において、対話式調査法にセットされる分析方法は「解釈的」あるいは「主観的」なものとなる。すなわち、調査者が対話式調査法を通して得た対話記録と、そのときに受けた印象に基づき、それを再生しながらある項目につき主観的に判断し、評価する分析方法が必要である。こうした分析方法を「主観的分析法」と呼ぶことにする。

本報告では、具体的にこの方法を次のように実行している。Iターン者12世帯21人、補完的にUターン者3世帯4人⁷⁾との対話記録を、いくつかの共通する項目に集約し、彼らがもつその項目への意識や満足度の強さを主観的な判断に基づいて評価を行い、得点化した。ただ、この調査分析法は、すべての調査を同一人物が実施し、その分析も同一者が行うことが最低の条件である。なお、対話式調査法によるIターン者像の記録と、主観的分析法による結果を、3、4章において提示している。

しかし、調査対象者の数が増えると、対話式調査法と主観的分析法のセットでは対応が追いつかなくなってくる。また、分析結果に対する信頼性の問題も発生する。一方で、対象者の性格や考えなどがある程度の共通性をもって理解できるようになると、調査項目として設定でき、調査票の作成が可能となる。そこで、新たな調査分析の枠組みが必要となる。それが、共通の調査票に基づく統一的

な調査の実施であり、その分析法としての統計的（数量的）処理の実行である⁸⁾。

なお、対話式調査法・主観的分析法と調査票調査・統計的分析から、ほぼ同様の結論が導き出された。つまり、前者の方法論は後者の方法論を確立するための初期的作業であるとともに、それ自体が独立した調査・分析法として有効性を持つと考えられる。その意味で、対話式調査法・主観的分析法を、今後さらに方法論としてより深め、有効性を高めていく必要がある。

3. 1 ターン者の実像 — 対話式調査法の適用 —

以下、調査対象者15世帯25名の調査結果を提示する。

1) W氏

居住地：S町

年齢：26歳（昭和46年9月生）

出身：神奈川県S市（住んでいた頃は、愛媛で言えば野村・宇和レベルの田舎だった）

略歴：高校卒業後、大阪の調理師専門学校（平成2年～）

専門学校時代、バイトをしていた日本料理の居酒屋（串カツ屋）に就職（～平成7年）

阪神大震災後、神戸（4ヶ月）や出身地でガードマンのバイトをしていた。

現職：第3セクター林業会社F社従業員

家族構成：父（警察官）、母、姉（看護婦）、弟（医療技師専門学校）

S町に来たきっかけ

Be-ing（平成7年）を見て、S町役場に連絡し、資料請求したら来るように言われ、面接を受けて決まった。

S町以外の候補地

東京の出張所に資料請求すれば、どこの資料でも送ってもらえたので、手当たり次第送ってもらった。日本全国の半分かくらいの県になったと思う。実家にいても親と喧嘩するだけ。場所はどこでもよかった。強いて言えば、北海道や沖縄、九州、高知（一番反応がよかった。資料も分厚かった。）を考えた。こちらに来る前にバイクで四国一周をしたが、四国内はどこも一緒というイメージだった。愛媛についても松山と宇和島ぐらいしか知らず、友達がいるわけでもない（大阪にいるぐらい）。

前職をやめた理由

人間関係。自分のミスを人のせいにするような上司だった。ちょうどやめたいと思っていたときに、阪神大震災が起こり、自分のアパートにもヒビが入ったりして、もうやめようと思った。

仕事について

今までした仕事は、間伐（チェーンソー）、下刈り、伐った材の積み込み等。

最初の頃は体力的にきつかった。特に山奥になるときついが、柔道をしていたこともあり、体は鍛えていたので、普通の業務は問題ない。ついていけないということはない。

ケガを今までに3回した。まず、入社後1ヶ月目ぐらいに、キャタピラに材を積み込んでいたときに、材の位置を直していたら、上から材が落ちてきて、中指を挟み、6、7針縫うケガになった。2回目は去年の11月に、風邪を引いていて2、3日休んだ後で、完全に治っていない状態だったのが悪かったのだが、トラックに材を積み込むときに足を下ろしたところが崩れ、気がついた病院にいた。肋

と腰の骨を折っていて、全治2ヶ月だった。3回目は、約1ヶ月前にチェーンソーで枝打ちをしていて足を切ってしまい、しばらく放っておいたら翌日化膿して膿がたまっており、全治1ヶ月のケガ。現在休業している。労災が下りているので収入はある。林業に人が就かないのがよく分かる。辞めたいとは何度も思ったが、来たからには資格を取らなければ意味がない。現在チェーンソーの資格を持っている。フォークリフト、ユニック、はい作業、高性能機械（大型ユンボ等）の資格が取れるようなので取りたいと思うが、個人で取りに行かなければならない（取るためのお金は自分で払わなければならない）。その余裕がない。

他の仕事の選択

最初役場の人には開発公社の調理師やC社（CD-ROMの会社）を勧められたが、調理師にいい思い出はなく、全く新しいことをやってみたかったので、F社を選んだ。

収入について

月収12万。大阪より10万下がる。最初の話では公務員並という話だったが、単にS町の（公務員給与の）レベルが全国でも最低で、それと同等というだけ。車のローンに月約3万、保険に約1万で合計4万5,6千円飛んでいる身にとっては、ぎりぎりの給与。

車について

5,6年ペーパードライバーだったのに、こちらに来ていきなりMT車を運転させられたのが、怖かった。何かひとつぐらいは贅沢をしたいと思い、新車を購入した。トヨタのRAV4で、四駆のため作業に使われるのが嫌だ。

仕事後、休みの日の過ごし方

大阪にいたときは仕事が終わるのが夜中の12時ぐらいで、それから調理師仲間やバイトの子たちと朝の5時、6時まで飲んでた。休みには週1日と半日が1回あったが、忙しいときは全部飛んでいた。月労340時間で、朝の10時から夜中の12時まで働いていた。今は朝6時に起きて、弁当を作って（元調理師のため苦ではない）、仕事に行って、夕方に帰ってきて夜10時から11時には寝るという健全な生活を送っている。飲食店をやめたとたん、太ってしまっていたが、こっちに来て12,3kg痩せた。

今までテレビなんか見なかったのに、今はテレビばかり見ている。というよりつけている。ここはテレビが民放2つとNHKしか映らないのが不満。大分が入るので、TBS系も映りはする。EATがここに取材に来ていたが、ここでは映らないのだからしょうがない。ラジオも家では聴けない（入らない）。仕事場で聴くことしかできない。

土、日は休みだが、土曜日は平日に振り返ることもできる。これで平日に役場や病院に行くことはできる。休みに関しては台風の時は休んだ方がいいのではと思った。

この夏も台風の中、下刈りに行くというのには、びっくりした。

休みの日は掃除や買い物やドライブ。月4回はここを出る。買い物にはU町やO市に出かける。O市には本屋やD店（DIY・ホームセンター）、T店（ビデオ・CDレンタル）があるため。ちょっとしたものはN町、H町に買いに行く。松山や宇和島にも行きたいが、遠い。車の燃費が悪いので、ガソリン代がかかって行けない。大阪時代から釣りをしていた、たまに会社の人と海（宇和島）に釣りに行ったりはする。

会社はバイトを禁止しているからやらないが、許可が下りれば本当はしたい。

住まいについて

専門学校時代は会社がマンションを持っていて、2DKに3人で住んでいた。家賃は1人5000円で、

学校が終わって夜には、会社の店でバイトをするという生活。しかし、3人で暮らしているといういろいろともめ事もあり、N地区のアパートに引っ越す。家賃は2万3千円。4畳半で共同トイレで風呂なし。下の部屋にやくざがいたり、駅にも変な人がたむろっていたり、場所的に治安が悪かったこともあり、K地区のアパートに引っ越す。4畳半で家賃が6万円くらいと高かったが、ユニットバスがついていた。仕事から帰るのが夜中の12時とか1時なので、銭湯も開いていない。風呂つきという条件ははずせなかった。阪神大震災でこのアパートにもヒビが入り、仕事を辞めて、神戸で手伝いやバイトを4ヶ月くらいした後、実家に帰った。どんどん知らない家が増えていて、知らない人ばかりが近所を歩いている感じだった。あの近辺も物騒になってきている。血だらけの男の人が突然来て、その人のために救急車を呼んだり、事情聴取を受けたりで大変だったことがあった。S町では最初の役場の話では、F地区にできるアパートに住むことになっていたのに、突然Y地区の教職員住宅に行くように言われた。町からかなり離れていて、車もなかったし、何でこんなところに住まなければいけないのかと思った。住宅は2階建てで4棟ある。実際、先生は住んでいないと思う。去年は人がいなかったで庭を好きなように使っていたが、今は人が増えて、車でいっぱいになっている（3,4台分の広さしかない）。

こちらでの人間関係（つきあい）について

職場では、すぐ上が31歳で大阪出身の人。すぐ下が20歳ぐらいの地元の人になる。あまり同世代という感じではない。何かあったときに相談するのはMさん（課長）。後はだいたい会社の人。地元の人との会合や、飲み会にはよく誘われる。嫌でも逃げられない。「参加しないと村八分になる」と言われ、村八分になっても自分には関係ないんだし、今どき村八分という言葉自体もう使わないだろうと思ひ、嫌になった。行ったら行っただ、おじいさんの説教や戦時中の自慢話ばかり聞かされてうんざりする。青年団にも誘われているが、入る暇はない。休日は買い物など自分のことで精一杯。ああいう活動はうっとうしいと思う。元々球技は好きではないし。こっちに來た当初は、たまにIターンでFさんという製薬会社を辞めてここのC社に入社した人がいて、役場の話が違うとか、会社のやり方がなっていないとか、不満がいろいろあった上に、事故に遭い、何ヶ月も入院したこともあって、大阪に戻ってしまった。

役場の対応について

とにかく話が違ふ。住む場所についても、給料についても上げてくれると言ったのに。

今後の定住意向

永住するつもりはない。定住奨励金20万をもらう条件が3年間の定住条件だったので、あと1年はいなければならない（車の頭金に使ってしまった）。来年松山に行くことを考えている。愛媛県はいい。大阪は治安が悪かった。

病院について

S町は診療所はあるが大きなケガをしたときには隣のN町の病院まで行かなければならない。林業が危険な仕事なだけに、何かあったときには不安ではある。

目標について

今では林業以外の資格を取るのが目標。危険物取り扱いの資格を考えている。何か資格を取って松山で働こうかと考えている。

どうすれば林業に人が就くと思うか

役場や会社などの上の人間が外の世界を知らないのでは。もっと他社（町外）の状況を知るべきだ。

F社に関しても普通の会社ではあり得ないこと（許されないこと）を平気です。例えば、今年から能力給にするということを事前に話さずに突然やったり、保険で労災が出ない場合、月15日以上休んだら自分の給料から払わなければならなかったが、これも急に月10日以上休んだらということに変更された。なんの話もなく突然やることが多い。今ケガをしているのでケガをしていてもできる仕事があればいい。昼間みんなが働いているときにふらふら歩いていると、地元の人が怪訝そうにこっちを見ているのが分かる。

将来について

人並みの生活ができればいい。この仕事もケガばかりで収入が低い割に重労働。誰かがやらなければという思いはあるが、自分はうまくできない。失敗ばかりしている。

希望

給料を上げて欲しい。K町のI社だと制服も支給されるし（ここは自分たちで用意しないといけない）、重機もたくさん持っているし、資格も補助が出ると聞いた。同じ3セクの林業請負会社なのに。

S町のいい面について

残業がない。気楽（開放感）。人間関係には問題がない。栗をもらったり、ワラビをもらったりしている。根っからの悪人はいない。

2) A氏

現住所：S町

年齢：46歳（昭和26年1月生）

出身：東京都A区

略歴：高校卒業後、京都の大学（社会学部）入学

東京で会社員、塾（国語）講師

長野県上田市で上田紬を学ぶ（昭和56～57年）

実家に戻り、自宅でアルバイトをしながら上田紬を織る

結城紬に変更（8年間）

バブル崩壊と同時に結城紬業界も不振、再度アルバイト

平成7年11月～ S町に移住、天蚕センターに就職

家族構成：母（足立区）、姉（東京）、妹（東京）、弟（母と同じ敷地内）

機織り職について

30歳の時、人に使われない仕事がしたいと思っていた。その頃雑誌やテレビで上田紬が出ていて、市役所に問い合わせたところ工房を紹介してもらった。収入はないので、近くの別子温泉で皿洗い等のバイトをしながら、技術を身につけていた。1年弱で織る技術は身に付くが、生計を立てるには、作家、それも全国規模のコンテストで最低「入選」レベルの人でないと無理と言われる。東京の自宅に戻り、アルバイトをしながら機織りを続ける。機織りだけで生計が経つようになったのは結城紬を覚えて織るようになってから。結城紬は重要無形文化財に指定されており、組合がしっかりしているので、規格に合う商品（重要無形文化財シールが貼られる）を織れば、お金がもらえた。これで8年間食べていた。バブルが崩壊し結城紬が売れなくなる（1反100万ぐらいする）と、周りの機織りの人たちはどんどん転職し始め、先行き不安な状態になった。再びアルバイトをしながら、職を探し始めた。

S町に来たきっかけ

東京は確かに職は多いが、年齢枠が30歳までに限られている場合が多い。地方なら職は少なくとも、年齢にはあまり制限のない仕事が見つかるのではないかと思った。『U・IターンBe-ing』でS町を見つけ（天蚕センターのことは書かれていなかった）、役場に手紙を書いて自己PRをしたら、その返事に天蚕センターのことが書かれており、こういう職場があるのでとりあえず見に来て下さい、ということだった。

天蚕センターについて

平成3年にオープン。当初は京都短大卒の人を中心に地元の人3名を加えて経営されていたが、その人が2年間勤めた後、結婚退職したのでその後に入った。地元出身の3人は、60代の人が2人と40代の人が1人でそれぞれ家庭がある。

S町に来た感想

最初は旅行者気分。1年目はいろいろなことになれるのに夢中だった。例えば車にしても約25年もペーパードライバーだったのに、ここでは車がないと生活ができないから、いかに車に慣れるかが課題だった。

1年すぎた今、友達ができない。周りの同年代の人たちは、みんな家庭がある。婦人会に誘われることもない。お酒が飲めないからあまり会にも誘ってもらえない。慣れてくると、不便さや言葉の違い（関西のイントネーション）に嫌になる。最近はカルチャーセンターに通うようになった。

カルチャーセンターについて

まず、H流域グリーンピアが主催するパソコン教室（農林課の人の口コミ）。週2回あり、初級、中級それぞれ1ヶ月ずつ通った。マンツーマン指導でなかなか良かった。3,40代の人が多かった。今通っているのが、ホームヘルパーの講座と美術教室とピアノ。ホームヘルパーは社会福祉協議会が主催（社会福祉協議会の広報誌、町広報に掲載）していて、終了すると3級の資格がもらえる。50～60代前半の人が多い。美術教室（町広報と博物館の新聞の折り込みチラシ）はU町の歴史民俗博物館が生涯教育の講座の一環として行っていて、講師は大学の法文学部の教授。1人の画家の1つの絵について注目して学んでいる。ピアノは今まで全くやったことがない。音大卒の人（IターンのTさんがコーラスをやっており、その伴奏をしている人）が自宅（S町内）で指導している。

東京の場合は区より小さい公民館くらいの単位でカルチャーサークルというのがあって、それに応募したことはあったが、3セクで安く、人気があり、抽選で落ちていた。東京の頃通っていたのはスイミングくらい。

ホームヘルパー講座に通い始めたのは、これまでほとんど老人問題に関心がなかったのに、自分が年を取ってきたこともあって、ちゃんと考えなければいけないという気になったから。こういうカルチャースクール等に参加するのに、友達を作るという目的はない。年齢は大きい。20代から30代の変化は特に大きい。20代は自分のことしか考えられなかったが、30代になると社会との関わりの中での自分について考え始める。30代から40代の変化はその延長といった感じ。実習に行ったJ園という老人ホームで何か手伝いたいと思い、ボランティアをしに行った。今、講座の受講生を中心として独居老人を訪ねるボランティアグループを作ろうという話がある。松山は65歳以上の比率が15%だが、S町では35%と言う。ヘルパー（正式な）だけでは介護できないようだ。ボランティアの仕事の内容は独居老人宅に食事を持っていったり、話し相手になったりすること。町が食事の材料費に対しては何割か負担してくれる。ようやく自分の得た技術を生かすことができそうだ。

住まいについて

職場まで車で12,3分。森林組合事務所の宿直室だった所。6畳一間でトイレと流ししかなかったのを、もう一つ部屋を作り、洗面所とお風呂をつけてくれた。

4月にF地区にある独身者用住宅に移る予定。町長から直接話が来た。Iターンでも役場を通すと待遇が違う。行政の対応は目が届く範囲のきめ細かさ。田舎では人脈がすべて。

ここの3セク林業会社に勤めている神奈川から来た男の子はY地区の教職員住宅に住んでいる。彼こそその新しい住宅が提供されてもいいはず。彼には声がかかってない。情報が届きにくい。

長野では上田紬を習いたいという話を、最初に市役所の観光課の人に話したので、住まいもそこが世話をしてくれた。家賃は1万以下。8000円程度だった。広さは8畳ぐらい。

買い物について

日用品に関してはAコープ。美術教室でU町に行くついでに、そこのダイエーにも行く。たまにU市に行くこともある。月4回はS町を出る。

先にIターンで仙台から来ていた女性に最初の頃いろいろ教えてもらった。彼女はここでの生活を楽しんでいる。青年団の存在が大きかったらしい。現在青年団の幹部も務めている。この人と結婚したいと言っていた。

彼女ぐらい若いと(30代)いいのかも知れないけど、40後半にもなると適応力と言うか、柔軟性がなくなってくるので、Iターンは難しいのかも知れない。

農林業体験について

農林業をやってみたいという気持ちはある。東京で森林ボランティアグループの話を聞いて、ここでもそういう組織があれば、参加したいと思った。

センターの方のおうちの稲刈りの手伝いをさせてもらった。大半は機械でやるのだが、機械でできない部分があるので、そこを鎌で刈るという話を聞いて、やりたいと言って参加した。すごくおもしろかった。織物を染めるための材料を取りに山へはいることもある。

ヨモギを取りに行ったり、そのとき見つけたもので、これは染まるのでは、と思うものを取ったりする。機織りを始めてから、不便なものに憧れるようになった。

今後のことについて

この町が好きというのではなく、(まだ帰れないという)強迫観念でいる(しばらく定住)と思う。

1年目は夢中で、2年目は嫌になってきて習い事を始めだした。3年目でどうするか決まると思う。

機織りについて

中途半端。組織ぐるみでやってきた分、独創性がないし、ちゃんと勉強もしてない。どうしてもライフワークにしたいというのはない。(今までも)これといったものがない。そのときそのときのやりたいことをやってきた。

S町のこと

東京の物差しで計るとすべてが嫌。職業意識の違いを感じる。こっちはあまりにも低い。処理する時間も遅い。役場の決済も時間がかかる。これまでなあなあでやってきているから。東京では考えられない。大阪からIターンで来た29歳の男の子は、1年で帰ってしまった。交通事故で半年間入院したのも大きかったが、まず、話が違うということと、その職業意識の違いが最大の理由だったようだ。同じサラリーマンという仕事で、大阪と比較すると、話にならなくて、ばからしくなってくるらしい。しかし、こっちに來て開放感はある。誰も自分のことを知らないから、東京にいたときよりも開放感を感じる。何でもできる気はする。

時間について

通勤時間が短い分、家で過ごす時間が長くなった。本を読んだり、趣味の洋裁をしたり。ただ、洋裁の生地はここでは良いものがないので、東京に帰ったときに購入する。

電話の時間は確実に長くなった。東京や大阪、宮崎（友人がいる）など長距離通話が多い。

情報量の絶対的不足を感じる。以前は愛媛新聞を取っていたが、愛媛の情報しかないので全国紙（朝日）に替えた。夕刊も取っている。東京でも取っていた。情報誌としてかなり役立っていた。今は大阪の発行なので、そういう意味ではあまり役に立つことはないが、読み物として面白いので取っている。

3) M.Y・M.N夫妻

現住所：M町

家族構成：夫妻と1歳の子供

夫について

年齢：31歳（昭和41年5月生）

出身：兵庫県A市

略歴：大阪の大学を卒業後、東京O区に住み、都内の銀行に就職する。

平成9年1月M町観光公社に就職決定

4月～M町移住

妻について

年齢：29歳（昭和43年9月生）

出身：大阪府O市

M町に来たきっかけ

池袋で Be-ing の I・Uターンフェアが開催されており、それに参加して、M町のブースで町営のN公園の求人があることを知ったため。

他の候補地

北海道や東北や信州も考えたが、妻の出身も関西だし、西日本であることと四万十川の持つイメージに惹かれてM町を選んだ。

前職を辞めることについて

自分がいた銀行は安定しているし、辞める人はまずいないような所。ただ、そこにいるともう一生が決まってしまう。35になったらもう銀行にいるしかなくなる。その前に何か別のことをしたいと思った。(夫)

妻の意見

元々ぼーっとしていて楽天主なので、何とかなるといった感じだった。

移住後の仕事について

観光公社でも事務局は数字関係の仕事で、あんまり仕事内容は東京にいたときと変わっていない。どこも仕事は大変だと感じた。基本的に土日は休みだが、土曜は仕事をしていることが多い。

M町について

周りが全部知り合いというのが、今まで都市部でしか暮らしたことがないので（その感覚に慣れるのが）難しい。特に役場という職場は町民全体に監視されている感じがする。プライベートと仕事の境

がつかない（いろいろ集まりに参加することも役場の仕事の一環と言えそうだ）。地域の会合などに参加することに対して、地元の人あまり無理は言わない。気を使っているのだろう。避けてる面もあるのかも知れない。老人はやはり多い。（夫）

愛媛には城辺町にある友達のおばあさんの家へ遊びに行ったことがあった。そのとき四万十川行ッてカヌーに乗った。東京のフェアで「四万十川」というのを聞いて、「毎日カヌーが出来るんちゃうか」と思った。こっちに来て今までに1回だけ行ッた。余裕が出来たらカヌーも買ッて始めたいが、車の上にカヌー積んで川に行ッたりしたら、「よく遊んでいる」と思われるような雰囲気がある。（妻）旅行もこっちの人は行かない。慰安旅行とか町内旅行ぐらい。家族旅行にも行かない。どこかに行くときには餞別をくれる。だから、冠婚葬祭と言わないと出づらい。この前ハウステンボスに行くのに、親戚の結婚式と言ッた。（夫）

住居について

東京の住居では通勤時間は3,40分（ごく普通）。2Kで家賃は13万。駐車場代は2万。一生懸命働いてもこんな所にしか住めないのかという思いはあッた。電気等のシステムは便利だったが（ボタンひとつででお湯が沸くとか）。電気使用量はあまり変わらない。M町の場合は冬のエアコンに電気代がかかりそう。

町営の定住促進住宅（平成8年末完成。戸建て2階）に住んでいる。ここは4戸だが、近所に46世帯の町営住宅がある。公営住宅は年齢や最低・最高年収が条件として決められていることもあり、40代の人が多い。

前は虫がいるだけで過剰に反応していたが、こういう所だと虫がいて当然のような気がする。虫にも慣れる。蛙も掴めるようになる。

Iターンについて

Iターン者を本当に町（町民）が望んでいるのか分からない。Iターンの募集は振興課だけがお役所仕事としてやっている。だから町長が代わると、方針が変わって対応も変わったりする。町民の気持ちは橋や道路の建設に向いていて、Iターン者を呼ぶことなどに税金を使うなという思いがあるのではないか。Iターン者のための制度（特に呼んでからのフォロー）はどの市町村もまだいい加減だと思う。

企業でなく役場が移住させるやり方はつじつま合わせ。例えば振興課がIターンの促進計画を企画・実行して、人が呼べたか、呼べなかったかの結果は、決算のときに問われる。呼んできたIターン者の面倒を見るのは別の課で、その課は（Iターン者を）迷惑に思っているかも知れない。M町も現状はいいが今後どうなるか分からない。（夫）

Iターン同士で会って話したりすることはほとんどない。そういう会のようなものがあッたら面白いかも知れない。（妻）

ただ、一緒に愚痴を言ッても仕方ないような気がする。（夫）

Iターン後のフォローについて

個人的に声をかけてくれる程度で、その後なんにもない。住民活動を拒否していると思われる。こちらは分からないから何もしないだけ。何か貢献してほしいと思っているなら、生活の上で組のごとや、風習のことなど地域の情報がほしい。田舎の人はすべて受け身。こちらが話さないと向こうからはじろじろ見るだけで話してこない。ただ話し出すと、すべて話さないといけなくなるが。

地域のつきあいについて

46世帯が同じ組になった。2ヶ月に1回くらい集会有がある。バレーボール大会などもある。あまり必要性を感じない。地元の人も（この組は若い人が多いので）そのようだが、みんな無理をしている。組の集会有は出ないと2500円払わされる。仕事は欠席理由にはならない。ただし冠婚葬祭はいい。夫婦のうちどちらかが参加すればいい。集まることに意味があるようには思えない。回覧をまわせば済むような話のために集まる。こういうのは個人で出来ない問題を解決するためにあると思うのにここでは違う。あの組は活動してないと言われるのが嫌でやっているように思える。こういう慣習について変やなと思いがながらとりあえず従っている。ここの状態は中途半端。本当に助け合うわけでもなく、かといって、変えていこうという勇氣もない。昔から住んでいる人も町営住宅の場合は特に、あまり積極的でない。こういうのは変わらないと思う。世代が変わっても小さい権利（親父の意見の浸透力とか）を受け継いでいるから、そういうメリットを維持するために変わらない。特に生活していく分に支障はない。最低限のことに従っていさえすればいい。何かを変えることにすごい労力がある。そこまでやるほどのことはない。

町の保健課が主催している育児サークルが週一回公民館である。集まって話したり、子供をおもちゃで遊ばせたりする。そこに行くとき意外と小さな子供がいることが分かる。

収入について

前職の半分以下。逆にもっともらえるような（給料を上げるような）仕組みを作っていくのが、会社の運営という立場にある自分の仕事。自分の意見や考えを出せるという点では、責任もあり、前職よりやりがいを感じている。

支出（買い物）について

普段はAコープだが、高いので少ししか買わない。N公園の野菜売場が安い。タダみたいな値段の時もある。生協（共同購入）を近所の人と3人で利用している。東京でもやっていたので、後の2人を巻き込んでこちらでも始めた。（生協を利用するのは）若い人が多い。

本はH町に書店ができたのでそこを利用している。

急に日用品以外のものがあるときに困る。年に2、3回のことはあるが。宇和島まで行かなければならない。宇和島のほうがM町より安い。あまりものを買わないのは、品揃えが悪く、値段が高く、給料が少ないから。

H町には週に1、2回、宇和島には週に1回、松山には月に1回（夫のみ）。松山もわざわざ行くほどのものでもない。大阪に2、3ヶ月に1回は帰省しているが、そのついでに買い物もする（特にデパート）。

東京では共働きだったので、帰りにスーパーやデパートに寄ったり、外食をすることが多かった。外食は減ったが、我慢をしている部分は強い。（妻）

子育て（教育）について

高校からは宇和島かH町に行くことになるだろう。クラブ活動など遅くまであるようなものには、参加できないのかも知れない。都会には選択肢（学校や塾など）はたくさんあったが、そういうのは求めてない。

時間の使い方について

以前の方が仕事をしていた時間は長いが、逆に今の方が自分の時間は減った。本を読んだりする時間も今より多かった。前より土日の仕事は増えた。来年は班長だからもっと忙しくなるのでは。（夫）
そんなにかわらない。11月から畑を始めた。今後畑をする時間が増えるだろう。

主人の帰りが早いので何かに参加するときは子供を見てもらえろ。(妻)

情報について

最近パソコンを購入。田舎に来たら絶対いると思っていた。インターネットで情報を得なければいけないと思っていた。朝刊も朝に来なくて、昼頃来るから、インターネットで新聞記事を読まなければならないという思いこみがあった。(朝刊はちゃんと朝に来たので) 実際あまり使っていないが。新聞は全国紙(毎日)。

町長と町政について

前町長は外の人を呼ぶのに積極的だった。面接の時にも来ることをすごく望まれていた。畑がほしいと言ったときも、土地を持っている人に頼んでくれた。リーダーとしてはいい人だったが、金を使いすぎたというのはある。

現町長は所信表明をして立候補した人ではない。以前は役場の課長で、前町長とは対立的立場だった人。基盤はまだ出来ていない。今はN公園もうまく行っているので現状維持、様子見の段階。しかし、借金はいっぱいある。観光公社も以前より風当たりが強いので赤字は出せない。赤字が出たら何を言われるか分からない。自分たちの生活には、赤字でも黒字でも関係ないことだが。町の商店街の人の中には30万人もN公園に来ているのにうちには客が来ないと役場に文句を言ってくる人もいる。役場が何とかすることを望まれている。小さいところだから近所づきあいの延長のような(役場の住民に対する)対応。知り合いの住民に気を使いながら、仕事をしている。

責任をみんな取りたがらない。ホテルの運営も町長が一応方針は出すが、ちっちゃなことは決めなければならない。それを誰も決められない。逆に自分の意見が通る。その結果を見られている状態。

このくらいの1つの町村で何かやろうとしても変わるものではない。今、州県制というのが言われているが、そのくらいの範囲にならないと無理だと役場職員たちの間でも話している。

メリットについて

都会を抜け出せた。こんな混雑したところで住むのはおかしいという思いがあった。空気がきれいで渋滞がないこと。

目標について

短期的には、会社は財団法人ではあるが、実際は町直営でダミー的な3セクでやっている。これをきちりとした組織にしていくこと。

長期では町全体の活性化。M町もまだ観光面では食べていけない。(夫)

夢について

晴耕雨読。田舎に来ることに抵抗はなかった。銀行を辞めることにも抵抗はなかった。先が見えない状態を楽しむような性格なので、現在もこの状態を楽しんでいる。だから、M町で終わるといったことも考えてない。(夫)

これまでの農林業体験

全くない。逆に今まで農的、あるいは自然的生活を全くしてないことに、漠然とした不安感を持っていた。妻が今畑仕事をしている。そういうような家族の理解も得られていることが、どこでもやっていける自信につながっている。(夫)

4) F氏

現住所：M町

年齢：32歳（昭和40年7月生）

出身：神奈川県横浜市

前職：建設業

家族構成：妻（宇和島出身）、と2歳9ヶ月の子供

移住の理由

仕事が遅くなることと、通勤に時間がかかること

きっかけ

Be-ing のU・I ターンフェアに参加したこと。

M町に決めた理由

妻が宇和島出身のため、愛媛というのは決めていた。フェアに参加したときには、中山町もあったが、M町の役場の人と話をしてみて、リサイクルガラスを使うガラス工房や、地元の川をテーマにした水族館など、環境を大切にする地元の考え方に共感したため、決めた。試験は作文と面接があった。

収入について

3分の1に減った。貯金はできない。

住宅について

町営住宅。家賃は月3万3千円。組（4戸）の班長をしている。

仕事について

観光公社支配人補佐。非常に忙しい。

今後の希望

こちらに来た第一の目的はゆとりある生活がしたいということ。経済、精神、体力、時間等すべてにおいて。しかし実際これは不可能。ただ、環境面では実現している。

定住条件

本人の考え方の問題。衣食住がちゃんとできるような生活ができるということだろう。この場合は、町営住宅があるので、住の面ではいいと思う。衣食は仕事があればいい。特に男の人にとって仕事は重要。

今後の定住意向

最低10年は住みたい。

5) MA氏

出身：神奈川県Y市

年齢：49歳（昭和23年生）

家族構成：夫妻と子供3人

略歴：京都府宮津（2歳～小4）

大阪府（小4～中3）

静岡県（高校3年間）

京都大学農学部博士課程（稲の起源、タイの農耕儀礼、農村社会の研究）退学

岐阜大学医学部卒

滋賀医科大内科、消化器科、小児科勤務（昭和59～61年）

滋賀県E町診療所勤務（昭和61～平成3年）

H村国民健康保険診療所勤務（平成4～10年）

現住所：H村

農学部から医学部に転向し、医者になった理由

タイやラオスの山村で調査をしていますが、現地の人に還元するものがない。現地の人には別に調査は望んではいない。医者であれば何年かおいてもらえれば役に立つと思った。今でも調査をしたいという願望はあるが、家族を持つとそうはいかない。調査は国や民間の保証がなければ経済的に難しい。医者になるには国のお金をたくさん使っている。国立大学の医学部は学費が他学部と同じ。私学だともっと高い学費を払わなければいけない。その分、国の補助がでている。国に貢献するという意味でも医者になろうと考えた。農学部にいた頃は大学闘争時代だったため、大学に対する信用もないし、研究者になる気はなかった。

医者になったら僻地に行くということは決めていた。滋賀医科大で消化器科を選んだのも、一番検査が多いから。僻地では検査が出来なければいけない。あと幅広くこなさなければいけないという理由で、小児科や内科も選んだ。

H村に来たきっかけ

滋賀県E町（人口6000人くらいの町）では毎日忙しく、自分の目指していた医療は出来なかった。「日本医事新報」という雑誌（医師の大半は取っている。個人で取っていなくても病院においている。）の求人欄にH村の医師募集を見て、電話をした。施設の状態や機械の設備状況、人口等いろいろ質問した。翌日当時の村長から電話があり、熱心に説得され、行政としてやる気があるという理由で選んだ。

住まいについて

3年目に、診療所の横に医師住宅を村が建ててくれた。これも補助金で建つ。ここに来る前に村長から「住宅も建てる」という話があった。

H村の医療状況

午前中の外来の診療が終わった後、午後は何軒か訪問して診察し、夕方の外来診療というのが1日のスケジュール。以前の滋賀県にいたときに比べれば、まだ楽。午前中の外来が午後3時までかかっていた。夕方の外来はなかったが、とても在宅医療を出来るような状況にはなかった。

ここは保健婦が優秀。H村に来る条件として、保健婦の優秀さもあった。滋賀では出来なかった保健活動が出来た。例えば各小中学校をまわり、成人病を予防するための食事指導を行った。子供たちと一緒に料理を作り、その食材の栄養的機能を教える。食生活は大人になるとなかなか変わらない。そうなるまでにやらなければならない。ファーストフード店やコンビニに行っても、選ぶ基準を持っていれば、栄養の偏り等をなくすよう配慮するようになる。医療で最も大事なことは病気にさせないことと、病気を早期発見し、管理すること。都市部の普通の開業医や大学病院ではできないこと。小さな町村の方がやり安い。都市部は病院がたくさんあるので病院の診療圏が重なる。人口が少ないのでほとんどの人が自分の所に来る。そのため全体の把握が可能だから、自分がやっていることの評価が出来る。

村内の一人暮らしの70歳以上のお年寄りの数は50数名。「独居老人友の会」というのがあり、会員は25名。月1回食事をしたり、リレー電話をしたりしている。

H村を出ていく理由

在宅医療を行っていると、「私の死に水を取ってくれ」と言われる。昔はそれに「わかりました」と

答えていたが、最近はその言えない状況になった。お年寄りが村で最後まで暮らせない。都会にいる息子や娘の所へ引き取られている。ここでは介護スタッフが不足していて、十分なケアが受けられないから。

H村に来て保健、医療は出来たと思うが、福祉は出来ない。これからは医療より福祉（リハビリも含めて）が主体にならなければならない。痴呆や寝たきりの老人は急激に増加している。福祉がしっかりしていなければ家族がつぶれる。田舎でも今の3,40代の夫婦はほとんどが共稼ぎで、親に何かあっても看ることが出来ない。そのために嫁が仕事を辞めるというわけにもいかない。収入が半分に減ってしまっただけでは子供の教育費等もあって経済的に支障が出てくる。そこで昼間はデイサービスに預けたり、朝夕ホームヘルパーに来てもらえたりすれば、かなり楽になると思う。主婦が一番忙しいのは朝起きてからの1、2時間と、夕方の食事や風呂の準備の時間。そのときにヘルパーに来てもらい、お年寄りの世話をしてもらいたい。

この程度のことはトップがその気になれば、人口の少ない町村ならすぐ出来るはず。これをやれば来期も当選するというのにやらない。片方（の村長）がやってきたことに対してあまり積極的に評価しない。

ムラの政治の仕組み

今の村長も、「前の村長が引っ張ってきた人」というのがあって言いにくいのではないかな。この村はA派という前村長派と、B派という現村長派にまっぴたつに分かれている。昭和52年にそれまで4期村長を務めていたA前村長のお父さんとB氏が村長選で1票差という結果になったことがあった。これが裁判沙汰になり、結局同票扱いで抽選でB氏が当選した。この期は4年を2年ずつに分けて担当したらしい。それぞれにシンパがある。有権者数は900人で450取れば当選する。基盤としてお互いに300持っていて後の150を金で買えばいい。1人3万として450万出せばいいことになる。

この前の選挙でも440対410の僅差だった。

前村長は確かにやり手だったが、あまり人の意見を聞かず走ってしまうところがあった。マスコミや他の市町村や県の受けはいいが、村の年寄りからするとそうでもない。山村留学でもT I地区の人はいいが、それ以外の集落の人にとって見れば、別にメリットはない。村民のためにはなっていないように取られている。住民が望んでいたものとはズレがあったのではないかな。しかしそれでも、現村長よりはいい。今の村長は何もしない。決断力もないし、計画性もないし、実行力もなければ、責任感もない。この3年間で彼がやったことと言えば、小学校を改築したことぐらいだ。しかし、保育園も統合しているようなところで、小学校を改築することになんの意味があるのか。本人もあれはやらなければ良かったと言っているような始末だ。

自分が辞めると言うまで何もしなかった。おそらくあのまま黙っていたら何も変わらなかっただろう。村長に対して10項目の提案を出したが、今ようやくそれをやり始めた。

不満は村長だけでなく、行政や住民に対してもある。特に若い世代の住民にしっかりとしてほしい。55歳から60歳の世代より上は、まだいい人材が少なくないが、それより下の世代は外に出てしまっている世代。優秀な人材は町へ出てしまっている。ここには親の関係や能力的に出ていけなかった人たちが残っている。そういう人たちが今、役場で課長になったりしている。この人たちは村を出てないから、ずっと村の価値観で生きている。彼らを変えようとしても、もう無理だろう。もう少し下の30代から40代前半の世代は、都市生活が嫌になって帰ってきたようなUターン組も多い。意識して帰ってきている分、人材はいい。しかし彼らも、どうせ（村は）変わらないという状況に慣れきってしまっ

た感じがする。村の場合は役場が変わらないと変わらないのでは。

今後について

滋賀県のH市に行く。老人保健施設の施設長として来てほしいと1年前から言われていた。2, 3回打診があり、在宅介護と訪問看護の支援、ホームヘルプステーションの設置が可能ならばと答えていた。在宅介護と訪問看護については、市からの援助があり、ホームヘルプステーションは単独で設置するという返事が来たので、行くことに決めた。この村を出ることについては、やり残したことを途中でやめるようだし、半分は寂しい気持ちもある。村長が代わればという思いもあった。しかし、今後福祉サービスは不可欠。自分が辞めることで村が変われば、そのほうがお年寄りにとってはいい。後任の医師も決まったようだ。その人がどれだけがんばってくれるかにかかっている。

この村は日本の平均的な町の30年先の状態をいっている。日本はこれから高齢化が進み、人口は減少する。在宅医療を、ここで、できるだけ金をかけず、効率的にやりたかった。高齢者は今まで病院が預かってきた。薬や入院の費用に40万の負担が家族にかかっていた。そこで病院に入らなくてもいいような人の場合は特養老人ホームなどにすれば、2, 30万の負担になった。さらにそれが在宅になれば、その半分で済む。在宅は高齢者本人が希望しているし、家族も（ヘルパー等によって）負担さなくなればその方がいいと思っている。在宅を進めるには、ヘルパーが家の手伝いをしてくれたり、土日も来てくれたりするなどの対応が出来るようにならないと意味がない。今後ヘルパーに対して家族の1割負担が法律で義務づけられれば、役に立つものでなければ需要がなくなる。それと、もう一つ重要なのは、給食サービス。年を取ると食事を作るのも億劫になり、簡単に出来るものしか食べないため栄養が偏り、余計に弱る。田舎に親を残している息子や娘が心配しているのは、親が健康であるかどうか、倒れていないかということと、火の始末。給食サービスがあれば火を使うこともないから、火の始末を心配することもない。一食300~400円の実費をもらえば十分。そのくらいなら子供が払うかも知れない。

H村を福祉の村にすればいい。これらの福祉サービスを充実させれば、子供たちも帰ってきてこの村に住むかも知れない。都会に親を呼び寄せても、結局施設に預けるようになる。それならこの村ではとんど負担なく、共稼ぎで親を看ることが出来れば、その方がいい。H村なら松山の通勤圏としての可能な範囲であるし、出来ない話ではない。自分が村長なら絶対そうする。ただ、ここではよそ者は村長にはなれないが。

10年以内に町村統合の話は必ずある。このままの状態（村が2派に無意味に分かれているような）が続けば、H村の存続は危ぶまれるのではないか。

6) H夫妻

注)「→」以降は、平成12年に追加調査を行った結果である。

現住所：M町

夫について

年齢：42歳（昭和30年10月生）→44歳

出身：大阪市内 騒音のひどいところ

前職：美術教師（中学）

略歴：大学卒業後、絵か音楽で食べていきたいと、通信教育で教職を受講。資格取得。

妻について

年齢：44歳（昭和28年7月生）→46歳

出身：大阪府Y市 住宅街

10歳（小4）の長男と6歳の長女あり →長男13歳（中1），長女8歳（小3）

天王寺美術研究所（公立のカルチャースクールのようなところ）で知り合う。

住まいの変遷

T市内団地（8年間）

家庭菜園

市民農園をやっていた

K市内借家一戸建て（3年間）

環境のいいところを選んで住んでいた。

移住の目的

夫が40歳になり、農的生活（転職）をするなら、精神的にも肉体的にもこれが最後のチャンスと思ったのと、より自然に近い状況で暮らしたいという思いがあった。

絵が描きたいというのも大きい。

田舎志向の理由

中学の時、先生がワンゲルのようなクラブを作っていた。それに所属して、山歩きやキャンプやスキーなど、自然と戯れた友達との楽しい思い出が、もともっているのではないかと。（夫）

M町を決めたきっかけ

約3年前、雑誌『田舎暮らしの本』で見つけた高知県T村の不動産屋の紹介。最初はT村の物件が目だった。それを見に行ったが、入り口が急勾配で前が崖で、大型トラックが頻繁に通っているような所だった。子供がのびのびと走り回れるというのが条件だったから、イメージが違う。その不動産屋に友人のM町に土地を所有している人を紹介してもらい、結局その人の土地に決めた。

土地探しについて

候補地はほかに和歌山や京都にもあり、いくつか見に行った。希望しても抽選で落ちたり、雑誌と内容が違ってやめたりしていた。M町に関しては、「四万十川」のムードに惹かれて決めた。物件もピンからキリまで。何千万という京都の茅葺きの豪邸もあれば人がいるのに売りに出されているといったものまである。雑誌のほかにも登記簿まで載っている、新聞のような田舎の情報誌があった。年間購読料が1万円。これはかなり怪しかったかも知れない。予算は2～300万でよかった。安いに越したことはなかった。

自給自足の生活を考えていた。

I ターンの理想の人について

北海道に神戸出身のKさんという人がいる。その人のことはパンの雑誌で妻が見て、憧れていて、直接会いに行った。ご主人は家具作りをしていて、かなり本格的になってきている。木工のほかに養鶏と田圃と牛で生計を立てている。奥さんがパン作りをしている。この人たちは以前は兵庫県宍粟郡という山の中に住んでいて、そこを開墾して掘った小屋を建てて住んでいた。北海道では小学校の廃校を、月2千円くらいで借りて住んでいる。

→その後、この夫妻はパンづくりをやめて、ご主人の木工だけで食べていけるようになったらしい。

奥さんも春（平成12年）まで保育園に勤めていたがやめて、ご主人の手伝いをしている。

小学校の廃校は、部屋もいっぱいあって、パン作りや、木工をするのに、非常に都合がよく、グラウンドも使えるのを見て、自分たちもペンションをやりたいがっていた友人と一緒に探した。雑誌で「廃校あとに住む」という特集があって、和歌山県内で3つくらい見た。しかし、小学校は地元のお年寄

りのシンボルだから、貸すのは抵抗があり、部落の会合で承認が必要だった。そこで、現地を訪れる人のために使うなど、地域に何らかの形で還元できるような使い方をしてくれなければ貸せないと言われた。現地の長老などに人間的価値を認めてもらえなければ、土地や家（特に学校）を取得するのは困難だと思った。

I ターンのネットワークができたらい。他の人がどんな風に考えているのか知りたい。

→最近ではI ターン者のネットワークができつつある。町のホテルの料理長が1年半くらい前に替わって、他県から新しい人が来た。その人がパンを気に入ってくれて、パンの話をするようになって、あるパンを焼く人を紹介したりした。

また、大阪から来た人で桃を作っている人がいて、その人と桃のジャムを使ってパンを作ろうかという話をしたこともある。

住まいについて

家と倉庫と土地を購入。価格は二重取引で、高く言えば所得税がかかるので、聞かれたら半額くらいで言ってくれと言われていた。土地をいくらで売ったのかということに、地元の人結構敏感。作業をしているときにもよく聞かれた。「高かったです」と答える程度にしている。倉庫にはトラクターやコンバインが入っていた。倉庫をパンの製造室にしたり、家も子供部屋の床を張ったりと、半年ぐらいでほとんど自分たちで改装して、改装費は50万ぐらい。元々自分たちでものを作るのは好きだった。いろいろやっていると、地元の人たちが声をかけてくれて、野菜をくれたりもした。遠くから見に来てくれた人がいて、その人にトラクターを出してもらったり、機械を動かしてもらったり、一緒に材を運んでもらったりとかなり助けられた。この間収入はゼロなので、貯金を食いつぶしていった状態。

パンづくりについて

元々趣味だった。小麦は九州の会社から取り寄せた。東北産のもの。天然酵母は星野天然酵母（東京都町田）のものを使用。雑誌『自然食通信』で知った。（妻）

絵が描きたいというのが一番にある。パンづくりは収入源にすぎない。

→今は単なる収入の手段からネットワークをつくる手段に発展している。パンを作ることによって人が訪ねてきてくれたり、手紙をくれたりする。これだけを仕事にしたいわけではないが、エネルギー源になっている。2年前の夏くらいに、もうやめたいと思っていた頃、M町出身の人からパンがおいしかったという葉書が来た。実質的には励ましが多い。温かいまなざしで見守られている。

農作業について

芋と生姜を植えてはいる。しかし収穫する暇がない。

本当に農業が好きで来た訳ではないと最近気が付いた。農的な生活や雰囲気に対する憧れが昔からあって、ここに来ている。

→最近余裕が出てきて畑を始めている。

収入について

半分以下に減った。生活はぎりぎりだが、近所の人にはものをくれるし、あまり困ることはない。

→収入は3分の1から4分の1。季節によって違う。夏休みやゴールデンウィークなど。困っているのは困っている（収入について）。固定客が決まってきた。

パンの販売先

M町とH町とN村で個人、役場、会社、学校、保育園等に販売している。

一昨年の夏は休む。前年出したが売れなかったため。パンの賞味期限は短い。外回りはたまに行く以外はやめる。絵を描きたい、フリーな時間が欲しいと思ったから。仕事をするのは必ずしも嫌ではないが配達のにぎわいに流される。やりたいことが出来ないとストレスになり、都会以上に時間に追われる気がする。昔は収入に対する不安があったが、今はお金では得られないおもしろさを得ている。

水族館の外の市場や、H町の酒屋においてもらったり、京都（妻の友人の知り合い）に1週間に1回送っていて、2年間続いている。

地域の会合について

集まりは多すぎると思う。草刈りに参加したり、交通安全指導員をしたりしているが、参加する人数は（人口が少ないため）少なすぎる。自分たちは来たばかりだから地元の人が遠慮してあまり声をかけないようだ。

→交通安全指導員は2年で終わる。今は公民館分館長になっていて、前以上に忙しい。2年目。町の行事の世話をしたりしている。盆踊りなどもう終わりにしたいと思っているが終われないのかも知れない。子供のゲートボールチーム（5人。野球以上にチームワーク必要。）があって、松山で県大会があった。県でも5チームしかいないため、3回勝てば優勝して全国大会に進める。結局全国大会に進出することになった。

会合も回数が多いとは思いますが仕方がない。思ったところで仕方がない。感想にしかならない。草刈りにしても人がいれば、草が踏まれて生えないが、人がいないから逆に草が強い。草は刈らないわけにはいかない。

子供について

こちらに来て明るくのびのびしてきた。当初は体操服が違うとか、言葉遣いが違うとかよそ者いじめはあったが、来た時期が夏休みだったので、しばらくすると部落の子が、魚釣りや水遊び、ラジオ体操に誘ってくれるようになった。人数が少ないだけに年齢に関係なく遊ぶ。子供の数は全校で200人切っている。来年は6年生が2クラスになって、新入生も17、8人だから、160人くらいになる。子供の出入りはある。通学はマイクロバス。田舎の子でも最近は歩かない。

→上の子が中学生になった。昔はバスがあったが、今は寮に入ることになっていて、朝夕食事つきで5000円。見回りもあり、自由でないので嫌だということで、この集落の中学生3人は自転車で30分かけて通っている。

子供についても、野球やサッカーのようなメジャーなことをしたりすると、試合数をこなさなければならぬし、なかなか認めてもらえない。都会のように人数が多すぎれば、声をかけようと思うとタイミングが遅れたりする。逆にマイナーなことだと3回勝てば全国大会に行く機会が与えられる。田舎は人数が少なく目が行き届くので、ほんの少しのことを取り上げてほめてもらえる。

人間関係について

絵を描きに来たはずであるのに、パンの製造、販売に追われる毎日に対してジレンマに陥っていたが、「自分探しのセミナー」に参加し始めて、ようやく気持ちにゆとりが持てるようになった。このセミナーは東京のU氏が全国で開催しているもので、自分を解放するために声を出したり、自分について話をしたりする集まり。2、3ヶ月に1度H町やU町で行われており、平成8年9月から参加している。これに参加するきっかけとなったのが、H町で自主上映された映画「地球交響曲（ガイアシンフォニー）」を観に行ったことによる。そのアンケートに答えたことから、主催者のH町の人にこのセミナーを紹介された。

今まで（1960年代の高度経済成長の頃から）物質中心、経済至上主義の流れに、ずっと疑問を抱いており、今ようやくそういった同じ考えの人々と横のつながりを持つことが出来るようになった。これも世の中の流れなのではないか。H町の人との出会いはここではかなり大きい。H町の人にはJAに勤めている。元々宇和島（おそらく）出身で奈良に出ていて、6、7年前に来たらしい。郡内で、タウン誌を出版している。

M町に住むと決めてから、このタウン誌を大阪に送ってもらっていた。

→H町の人とは現在は疎遠になった。セミナーも去年の秋にコンサートに行ったのが最後。今は楽な人間関係を選ぶようになった。いいか悪いかは分からないが、今生きていることを楽しむ、今やりたいことをする、そういう生き方ができるようになった。許容範囲は広くなった。大阪では絵を描かなければいけないという義務感に駆られていた。ここでも地域の人に、絵を発表する場を提供してもらったりもした。流れることもあったが、それはそれでいい。

ありのままの本来の自分が出せる場をみんな求めている、その動きがIターンと言えるのでは。

行政に望むこと

スウェーデンのような教育と医療にお金のいらない福祉優先の国に日本もなればいい。ここで暮らしている人が、お年寄りも含めて、良かったと思えるような地域を目指してほしい。役場に対しては、マスコミ出演の依頼が何回かあったが、特別視しないでほしい。

出来ることは自分です。そうできない人に何かしてほしい。

→お金がかからなくても済むシステム、気兼ねなく子供から老人まで楽しめるような場をつくって欲しい。日本全国。

7) T・H夫妻

現住所：M町

妻について

年齢29歳（昭和43年5月生）

出身：東京都S区

略歴：川崎ガラス工芸研究所（2年間）

静岡県伊豆（天城湯ヶ島町）の工房（3年間）

M町町営ガラス工房（平成6年9月～）

夫について

年齢28歳（昭和43年12月生）

出身：埼玉県T市

略歴：川崎ガラス工芸研究所（3年間）

静岡県伊豆（同上）の工房

茨城県（母親の実家）のログハウス会社 チェンソーを使ってログハウスの建築をしていた。

M町町営ガラス工房（平成6年9月～）

M町に来たきっかけ

前任の人（KO夫妻）の紹介。川崎の研究所で同期だった。

平成6年4月に役場の人と面接し、決定。

兄が高知大学に通っていたこともあり、M町にはガラス工房開設から2回来ている。四万十川に惹か

れた（夫）。

住まいについて

町営住宅（平成元年建設）一戸建て

家賃3万5千円。年収によって家賃が決まる。

伊豆では7、8人で寮生活だった。

M町について

住みやすい。

東京に帰るときに不便さは感じる。松山空港に着くまでに時間がかかる。（妻）

都市部まで1時間以内に行ける場所が理想。今まで住んでいたところはすべてそうだったから。（夫）

収入について

物価が安いわけでもないのに、他の工房に比べるとどちらかというと低め。東京に帰ること（交通費のこと）を考えるときつい。

地域住民とのつきあい

周りの人がすごくいい人。松茸取りや釣りに誘ってくれる。都会から来たからかえってかわいがってくれ、目をかけてくれる。

土・日の地域行事には仕事の都合上あまり参加できない（逆にこれが救い）。普段よくしてもらっていることもあり、2人のうちどちらかが参加するようにはしている。

住宅のある組での行事（草刈り）や公民館の行事や町民運動会といった地域行事が、（ここでの生活で）一番嫌かも知れない。

今後の定住意向

最低3年という契約で来たが、あっという間に過ぎてしまった。まだしばらくはいると思う。ここでいいのは外の人と交流があること。

自分たちが教えているガラス講座から、川崎のガラス工芸研究所に行くと言ってくれた人が3人いる（高知のN市の人と愛媛のT町とU市の人で、高卒2人と24,5歳の人1人）。自分たちがやっていることが少しは地域の役に立っているという実感があって嬉しい。本当は役場の人とも話し合うべきなのかも知れないが、このガラス工房の後継者について、こちらの出身者がいいのか、つてで違う（他地域の出身）人を呼ぶのかといえ、せっかくここで工房を作ったのだから、この人が（外で勉強して）戻ってきてもらえればそれが一番いいと思う。

ここは地域の人とのつながりがある。週2日のガラス工芸教室に、高知や宇和島や松山から来る人もいる。伊豆ではひたすら作るだけだった。

ここでは役場の人自由がやらせてくれる。（伊豆時代から飼っている）犬を工房に連れて来ても何も言わない。それがやりやすい。

8) KO夫妻

現住所：M町

夫について

年齢：31歳（昭和41年4月生）

出身：長野県M市

略歴：東京農業大学中退（1年間）農業をちゃんとやるには大変、自分はそこまで面倒見がよくない、

向いてないと思った。

川崎ガラス工芸研究所（3年間）

伊豆のガラス工房（半年）

金沢の工房

M町町営ガラス工房（平成4～8年3月）

契約終了後実家に戻る

再度M町に移住し、工房を開く（平成9年8月～）

妻について

年齢：34歳（昭和38年5月生）

出身：埼玉県K市（工場やマンションが林立しているような場所）

略歴：武蔵野美術短大卒

デザイナー（ディスプレイ等）見習いとして就業（3年間）

川崎ガラス工芸研究所（3年間）

伊豆のガラス工房（半年）

実家に戻り近くの工房に通う（半年）

M町町営ガラス工房（平成4～8年3月）

契約終了後実家に戻る

再度M町に移住し、工房を開く（平成9年8月～）

ガラスに興味を持ったきっかけ

高校の時北海道に行ってガラスを見たこと。昔から「ぷらぷらしたい」と思っていた。

自転車で世界一周をしているのに憧れたりすることもあった。青年海外協力隊も考えた。

ガラスを仕事にしようというところまで考えはしなかった。ただやれば良いと思っていた。（夫）

小さい頃から何か創ったり、絵を描いたりするのが好きだった。デザインは仕事として食べていくために選んだので、流行りすたりがあり（それに合わせていったりしなければならぬので）、好きなことをやっているという実感はなかった。美術雑誌を見てガラスに惹かれた。（妻）

研究所の学費

3年間で200万（入学金含む）

親に借りる形で。研究所に入ったときから（仕事にする）決意はあったので。（妻）

窯の管理のバイトなどをしていた。（夫）

伊豆の工房について

研究所の同期で40代の女性が出資して、工房を開くことになり、そこに同期の7、8人が一緒に働くことになった。しかし、それまで同級生だったのに、「お金を出している」人のいうことを聞かなければいけないのはやりづらく、半年で辞めてしまった。

ガラス工芸の職探し

個人工房か市町村や企業の工房の職員として働くことになる。それぞれ作るものも作り方も全く異なるが、場所は問わなかった。ガラスをいじればどこでもいい。

M町ガラス工房を知ったきっかけ

高知の工房に研究所の先輩がいてその人の紹介（夫）

夫からの紹介（妻） ガラス（吹き）作りはペアが基本。一人でもできるが困難。

情報提供者はどうやって情報を得たのか

M町から川崎の研究所に求人があって、研究所が先輩に依頼したらしい。

競争は

研究所は1学年40人ぐらいで女の人が多い。自分たちのような「吹き」と「ステンドグラス」と「カットグラス」の3つの部門に分かれている。M町の場合お客さんに中吹きの製法を見せるということと、窯の管理ができる人間が必要ということが条件としてはっきりしていたので、自然に絞られてきた。契約は早い者勝ち。

M町の最初の印象

四国自体初めてだった。夏の暑さに驚いた。(夫)

川がきれい。山がこんなに迫っているところに住んだことがないので、山に驚いた。(妻)

ここで暮らすことに対する抵抗はなかった。

買い物について

しばらくは、「コンビニがない」、「ファミレスがない」とないものの発見の連続だった。いかに自分たちがコンビニにお金を使っていたかも発見した。

以前住んでいたところはM町の中心部だったので比較的買い物はしていた。

今はまとめ買い。ほとんど隣町のスーパー。たまにU市に行く程度。

住まいについて

以前は町営住宅に住んでいて、家賃は一人¥3000だった。半分(¥3000)は町が負担のため。人と接する機会も多かったが、干渉もなかった。入りやすい環境だった。年齢も職業もバラバラで、地元出身者の人が多かった。組の班単位でお月見会や草刈りなどいろいろなイベントがあり、しょっちゅう飲んでいた。煩わしさは感じず、そういう「つきあい」が新鮮だった。住み心地は非常によかった。

現在は工房と家の両方で、月3万。高い。1, 2万と考えていた。大家さんもいくりにしていいのか分からなかったようだ。いい部類の町営住宅と同じ値段にしている。町の補助はない。立地的に崖崩れに対する不安はある。こういう崖の上に住んだことがないので、どうなるのかよく分からない。仕事の後飲みに行く回数は大分減った。特に窯に火が入ってから。少し寂しいが、窯のそばに住んでないと、窯は24時間火が付いているので何かあったときに不安。材料や道具等いろんな運搬のことを考えても、やはり工房の近くに住むのがいい。

M町に工房を開いた決め手

家賃が安いことと、なじみがあること。いろんな条件の整ったところを探す労力を考えると、役場など地元の人とつてがあった方がいい。

町営の工房があることのメリット

たくさんある。特に機材が借りられること。全部揃えると高額になる。

感性を養うことについて

雑誌などでなく、本物を見ないと大した刺激にはならない。都市部に住んでいたからといってそんなに頻繁にガラスの展示会に行っていたわけでもない。金沢(あるいは川口)にいたときも必要性を感じなかった。作品を見に行くのは波があり、いいものが作れているときは全く行かないが、自分の作品がつまらなくなってきたなと思えばどんどん行く。意外とガラスでなく絵画展等に行きたいと思う。そういうのに行きたいと思ったときに、会場はほとんど松山に集中しているので距離や不便さは感じる。

展示会（作品を出す）はどのくらいあるのか

2ヶ月に1回（平成9年8月～11月）。全国で行い、愛媛県より他県の方が多い。

東京はものがありすぎて売りにくい。隙間がない。松山のような地方都市の方が1回人を集めれば、また集まる。顧客が付きやすい。

ガラス工芸の場合「作るところと売るところは遠い方がいい」といわれている。

販売専門のギャラリーと契約した方がいい。陶芸の場合は、窯開きがあって、それを見せることに儀式性があるが、ガラスは毎日が窯開きであり、製品がその場でどんどん出来ていくので、あまり見せるものではない。

収入について

町営工房にいたときは手取りで月25万あり、ボーナスもあった。現在は貯金を食いつぶしている状態。野菜（大根、白菜）を作ったり、タケノコや栗や蕨をとったり、ご近所や友人からパンや野菜等もらったりして、あまり困っているという感覚はない。

希望所得は売上1000万×0.6＝600万－経費200万＝400万

今後の定住意向

最低10年は住みたい。

町に対する要望

特にない。要求すると見返りを求められる（例えば工房を観光客等に見せてくれとか）。強いていえば無用な道路工事はやめてほしい。

同業のネットワーク情報について

窯を作る場所等については探しているということが分かれば、やきものの人もガラスの人も情報は提供してくれる。

趣味の変化

釣りバイクと酒。趣味として変化はないが、外に出るのが億劫になってきた。年のせいもあるのかも知れないが。（夫）

腰痛のため体力づくり。エアロビクス教室（町主催のため10回で¥1000と安い）。家庭菜園（妻）

映画やコンサートに昔は習慣のように行っていた。最初はつらかったが、今はなくてもやっていける。たまに面白そうなのがあると、気にはなるが、実際行けない。四六時中聴いていた音楽も聴かなくてもやっていけるようになった。

病院についての不安

今は感じない。年を取ったらこういう所（過疎地域）の方がサービスがいいのではないかと思う。

来訪者について

週に1日ぐらい誰も来ないときがある。

休日について

日曜日に休むことにしている。（展示会の前以外）

若い人がいなくなることについて

子供がかわいそう。1人で遊んでるのをよく見かける。

9) S家

現住所：H村（平成9年～）

前住所：松山市

家族構成：夫妻

長女17歳（高3）、次女16歳（高1）、長男13歳（中1）、

三女8歳（小3）、母77歳（不動産）←T町の兄（長男）の家と交互

夫について

出身：O市（小学生から高3まで松山）

年齢：50歳（昭和22年2月生）

職業：建築士、取引主任

略歴：立教大学文学部史学科卒

塾経営（小、中学生対象）←昭和46～58年

昭和47年 不動産資格取得

昭和59年 2級建築士 資格取得

建築事務所設立（松山市）

妻について

出身：広島県M市（小6から松山）

年齢：39歳（昭和33年生）

職業：保母

略歴：短大卒業後松山で保母として働く。

H村に移住後、地元保育園に勤務（平成5年～）

次女について

出身：松山市

年齢：16歳（昭和56年生）

略歴：小学5年よりH村小学校に山村留学（2年間）

H村中学卒業後、現在高校通学のため、姉と二人で松山に下宿。

村の就業状況について

地元の人には農業の手伝いをしながら、松山に勤務したりしている人もいるが、50までの人は、役場か民宿（研修の宿のような）の官民もしくは準官民関係。あとSという土木の会社に2名いる。T校区14世帯のうち3件が松山の人。

住まいについて

村に来た当初は、3(L)DKの公営住宅。場所はT地区。郵便貯金の補助住宅で、3件の長屋のようになっていた。その中で、うちの条件は年収500万以上と厳しかったため、自分たちの前には入居者はいなかった。家賃は2万5000円。通勤40分圏としては高い。松山市内でも築15～20年の物件なら、3万である。この公営住宅には4年間暮らした。

中心集落にある中学まで5km。行きはいいが、帰りは登りのため、自転車で30分かかる。

新築した今の住宅は80坪。自分で設計した。職場（事務所）まで通勤40分。

買い物について

日用品はAコープ。近所の商店も夜10時までやっている。

松山には夫の事務所に行ったり、娘のマンションに行ったりする関係で週2回は出ているので、そのついでに買い物をする。（妻）

車の運転について

山村留学の頃は主人に運転は頼んでいた。こっちに住んでから1年半位してようやく運転できるようになった。こっちの人は街中が運転できないと言うが、私にしてみれば、山の方が怖くて運転できなかった。(妻)

村に来ることについて (妻)

奥のT I地区だったら嫌だった。この地区だから(松山に近いという理由で)来た。

農林業体験

夫婦二人とも全くない。ただ、家の横に2 aほどの畑があり、そこで母親が野菜を作っている(誰も手伝っていない)。母がこの家に来たときは畑仕事を主にしている。今、大根や白菜を作っている。松山の会社の横にも畑があり、そこも母親がやっている。

高校時代山岳部だったのは影響しているかも知れない。海に集まる人間と山に集まる人間がいて、自分は山型、農耕型なのだろう。(夫)

H村に来たきっかけ

次女の山村留学。学校の行事の関係で学期に1, 2度は行く機会があった。

いいところだという話はしていた。偶然前村長の奥さんの実家が近所で、奥さんに強く勧められた。そういう意味では全く身寄りが無いわけではない。山村への移住は、人の縁か仕事の縁か、宅地造成ではないか。(夫)

保育所の違いについて

松山の保育所は共稼ぎの人のためという感じで、時間も(親が仕事帰りに迎えに来るまで)長かったが、この場合は幼稚園がないから、母親が働いてなくても預ける。だから、時間は短くなった。週5回勤務。(妻)

地域での活動について

婦人会の誘いは家を建ててから(今年の夏から)。お年寄りを呼んで昔の食事を作って食べてもらう会だとか、文化祭に手芸の作品を出すとか、春に旅行をする計画もある。公民館では、1月に数珠回しがあったり、2年に1回村民体育会があってそのお弁当作りとか、バレーボール大会がある。学校行事は多い。PTAの慰労会(飲み会)が20日に1度ある。子供がいなくても14世帯すべてがPTA(人がいないから)。夫婦でそれぞれ別の役員になっている人もいる。(妻)

PTAの役員の活動はもちろん、公民館の社会教育というような名目で、ターゲットボールとかソフトボールをしたりする。こういう活動の多さにも直に慣れる。来たばかりの時は、(自分たちに対して)何でこんな田舎に来たのかと言う人は、PTAの中にもいた。しかし外部の人間だけではなく、村民の中にも村八分になっている人もいる。(夫)

子供が小さかったのでどちらかが参加するようにはしていたが、他の家庭は夫婦で参加している。(妻)

暇な時間、休日の使い方について

学校の用事か公民館の用事をしている。松山ではPTAの役員も人が多いから逃げることもできたけれど、こちらではそうもいかない。(妻)

地元のつきあいが多いい。松山にいた頃は飲み屋に行ったり、麻雀に行ったりと会社がらみのつきあいが多かった。(松山にいたときは夜、家で父を見なかった。：娘談)海外出張も多い。仕事の関係上、年平均50日は海外。今年は90日。アメリカやカナダに視察に行く。この家もアメリカの輸入住宅。(夫)

この家ができた夏頃から主人は家にいることが多くなった。デッキや倉庫を造ったりと、日曜大工的なことを始めた。(妻)

村のことについて

愛媛新聞にも出ていたが、H村にはM先生という前村長がわざわざ滋賀から呼び寄せた唯一のお医者さんがいたが、出ていってしまった。村では何億もかけて福祉センターを設立したが、それを上手く活用できる人材がいなかった。M先生の要望に、現村長と役場は答えていない。また、前村長が先生のために建てた家についてやっかむ村民もいたらしい。先生は自分のためにいい家を建てろとか、そういうことを言う人ではない。それにそんなに（やっかむほど）いい家とも思わない。60歳以上が7割も占めているのに、村民も役場も村長も何を考えているのか。無医村の状態のまま立派な箱ものだけは残っている。

村長が代われば方針も変わるというのはある。ここの選挙は絶対に対抗者がいる。というよりいなくてはいけない。大同団結して一人の村長に一本化すればいいのに、それは絶対にしない。選挙は「祭り」そのものだ。この村の祭りに似ている。御輿はあっても担ぎ手がいらない。8人でかくべき御輿に4人しかいない。それも背がバラバラ。仕方がないから軽トラに乗せて廻っている。

こうした状況をもてあましていく。70年代の安保世代で、学生運動のリーダーもしていたが、政治の縮図をここに感じている。役場50人に対して1人で気張ってもしようがない。選挙で票を入れたら役場に入れてやるというような、所詮そんな社会。

前村長の頃、S地区に10年間住んだら土地を提供という話があった。しかし田圃の水問題でつぶれてしまった。

この家を建てる時も水をもらうのに苦労した。それと、なかなか土地を分けてくれない。みんな土地はもっている。ただ先祖代々の土地を安く売るのは申し訳ない、近所の人から白い目で見られるという発想がある。土地を売ってもらえたのは、2年前の運動会で自分の活躍により、この地区が初優勝したこと。これをきっかけに、やっと売ってもらえた。お金なんだけどお金じゃない。これがムラのしくみ。なじむのには4、5年かかる。H村にも漆工芸や焼きものをやってるIターンの人はいる。かつては木工のおもちゃ作りをしている人もいた。彼も前村長が呼び寄せた人だが、約束が違うと言ってN町に移った。

この地区よりもT I地区の方が僻地の危機感があり、団結力がある。新しい人口は増えているのでは。年寄りが死んでいるから全体の人口は増えないが。

Iターンについて

(地域の人との) 共通の趣味があった方がいいと思う。自分の場合ゴルフや麻雀がある。そういうのがなければ来ても続かない。

移住したメリット

- 妹の体が強くなった。(次女)
- 広い家がある。猫3匹と犬1匹も飼える。(夫)
- 松山から帰ってきて気分転換が図れる。ゆったりできる。(夫)
- 趣味に没頭したり、新しいことに挑戦できる。例えば犬の散歩がてら山を歩けるし、坊ちゃん文学賞に挑戦したり。(夫)
- 近所の方々に野菜を頂く。(妻)
- 横の畑で低農薬の野菜をすぐ取って食べられる。(妻)

・趣味の花作りが、松山ではプランターだったが今は直に土に植えられる。(妻)

今後のことについて

家を建てたからずっといる。どこに行っても辛抱はある。最低限のつきあいはいる。ただ、人数が少ない分回数が多い。(夫)特に小学校が一番多い。学校対抗ソフトボールとか、運動会とか。学習発表会で午前の部で子供が発表して午後の部は父兄の発表というのには驚いた。そのあとはまた慰労会。

(妻)

それだけ娯楽がないということだろう。(夫)

山村留学について (次女)

<きっかけ>

小学校4年の2学期の終業式の時に友達のお母さんから、ちらしをもらった。それを見て。小学校は家から遠かったし、松山にはいたくなかった。

<H村に来たときの感想>

自分が知っている人しか(周りに)いないのが変な気がしたし、びっくりした。規模が小さいから。

<H村の人について>

いい人だけど世間が狭いから悪い噂ばかりしている。狭いなり良さもあると思うけど。

<山村留学>

はじめは良かった。2年目からはやめとけば良かった。原因は子供同士(山村留学生)の人間関係。

(山村留学の1期生は27人いて) 半分为2年目も残った。1年目に厳しい先生の元でおとなしくしていた子も、2年目から先生が替わって、悪い面が出てくるようになった。2年目だと行事に新鮮味もない。センター(寮)での生活にしても、小学生は分別がないから我慢をしない。24時間ずっと一緒にいるのはかなり大変。個室ならいいが6人一部屋。小学3年生から6年生までが同じ部屋だった。我慢することを知った。(次女)

昔は5、6年生が多かったが、今は1年生もいるらしい。(母)

最初の寮母さんは松山の人で19歳だった。若いけどよく働く人だったが、ストレスで胃潰瘍になって、2年間で辞めてしまった。(次女)

<地元の子について>

地元の子は影が薄かった。ただ、お菓子やゲーム、漫画をいっぱい持っていた。センターではそういうのは全部制限されていた。電話も1週間に1回10円分だけだった。今はずいぶん甘くなっているらしい。(次女)

<活動>

剣道をしていた。みんな何かに参加しなければいけなかった。

秋祭りの時は子供の役割を決められていて、夜は高齢者の所に行って、指導をしてもらったりもしていた。夕飯が終わったら外に出ては行けなかったの、それだけでうれしかった。1年目も外に出られないことは嫌だと思っていた。(次女)

<2年目も残ろうと思った理由>

1年目で自分が成長できたような気がしたから。行事も新鮮だったし。

<里親制度とセンター制度>

里親制度の方がまだ自由でいいと思う。

<現在の松山での生活との比較>

松山の方がここよりはいい。人間関係（しがらみ）がないことがいい。

留学センターの子は人なつっこいとよく言われる。おじいちゃん、おばあちゃんにとっては良かったのでは。（母）

最初の夏休みに帰ってきたとき、あんまりお行儀が良くなって挨拶もちゃんとするようになって驚いた。今思えば無理をしていたんだと思う。夏休みが終わる頃には元に戻っていた。（母）

<山村留学に来る子の特徴>

自己主張が強い子。1期生は特に。ほとんどの子が自分から山村留学を望んだ子。ある程度強い子じゃないとそういうことは言わないしできない。（次女）

地元の人には、それで地元の子が小さくなってしまふんじゃないかと心配して、反対していた人もいる。（母）

今は家庭や学校で手に負えないような子、登校拒否やいじめにあった子が増えてきているらしい。だから最後まで続かない子が出てくるのでは。（母）

<学校の先生>

センターの行事には参加していた。男の子はサッカーなどして一緒に遊んだりもしていたが。（次女）最近若い先生が多い。前も多かったが前より増えている。（母）

芸能祭という行事があって、満穂万歳だとか子供がいろいろ出し物をする。それを観ていて、T I 地区の子は元気でここの子はぼそぼそとやっている。ただ、T I の子の元気さも、うちの娘の場合の元気さと同じで、無理してて、空（から）元気なんじゃないかと思う。（妻）

留学したときの地元の子は、3年生の女の子1人と5年生の男の子が1人と新入生の子がいた。3年生の女の子は喜んでいて、5年生の男の子はちょっと嫌そうだった。新入生の子は外部生と同じような感じだった。（次女）

とにかく思い出したくない過去。1年でやめていれば、と、2年間いた子はみんな思っていると思う。（次女）

T I 地区のお母さんは今でも「Hちゃん（次女）元気？」と声をかけてくれる。（母）

10) N家

現住所：T町

家族構成：夫、妻、長男16歳（高1）、次男14歳（中2）

夫について

出身：大阪府M市（都市部）

年齢：44歳（昭和28年10月生）

略歴：昭和51年 鳥取大学農学部卒（作物学）

岡山県阿哲郡で養豚業と野菜栽培の手伝い（昭和51年10月頃まで）

北海道、九州、四国などの農家を廻る。そのときに愛媛県K町に土地があり、1年近く住む。

その後知人と4人で農業をしていた。

昭和62年 現住所の土地を購入し、家屋を建築

実家の家族構成：父、母、弟（大阪でサラリーマン）

大阪の頃

父親はサラリーマン、母親は雀荘で勤めていたこともある。三味線でも何でも出来た（家事以外）。

友人に人気もあり、カッコいい人。家でよく家族や友人と麻雀をしていた。昔は大阪でもちょっと行けば田圃や畑があり、カブト虫やバッタをよく捕まえていた。虫好きの少年だった。しかし、高度経済成長のもと、「松下」が近くにあったこともあり、住宅がどんどん増え、虫が住むような場所は無くなっていった。虫のいるところに住みたいと思うようになり、そのためには農業をやるというふうに小学生の頃から考えていた。スポーツは中学で（痩せるために）サッカーを始めた。妻は高校の同級生だった。大学は鳥取大のほかに、信州大学の林業科と京都府立大も受験した。

大学時代

鳥取大に入ってから、夏は北海道で酪農をし、冬は九州の農業試験場やサトウキビ畑でバイトをした。3年終了後、休学し、大阪中央市場で半年アルバイトをした。これが一番時給のよいバイトであったのと、家から通えるという理由による。仕事はリヤカーでの野菜の運搬。朝の5時から夕方5時まで働いた。ここで見たことのない野菜（タデやハーブなど）をいろいろ見た。普通の農家はこの市場に野菜を出すことを目標にするが、あんな高級料亭しか相手にしない市場に出すような野菜を作っても（農家は）負けると思った。残りの半年はオーストラリアのケアンズにホームステイし、小麦の収穫や、ポテトチップ工場でのバイト、羊の毛の刈り取り、リンゴの収穫などいろいろな仕事をした。ステイ先の獣医さんが近々来日し、20年ぶりの再会をする。その後、日本に帰ってから就職先を考える頃になって、改良普及員やカルビーなどを考えもしたが、「現代農業」に農業がしたいという文章、自己PRを投稿し、その全国からの反応を待った。

卒業後

岡山県阿哲郡で養豚場の経営と野菜の栽培をしている人がいて、その人の奥さんが先輩だったことから、そこの手伝いを10月頃までした。「現代農業」の投稿の反応は、70件も誘いがあったが、その9割は養子に来てほしいというものだったため、それ以外の場所を廻った。北海道は半年遊ばなければいけないのは分かっていたし、できれば九州か四国か西日本がいいと思っていた。どこでも、土地を貸してはくれても売ってくれない。根無し草だけに、土地を売ってくれなければ残るつもりはなかった。愛媛県のK町で、ミカン畑30aが売りに出されていると、元愛媛大学の先生に聞き、先生に100万借金して買った。土地さえあればやっていける自信はあった。K町には1年近く住んだ。

T町移住後

大学時代の先輩二人（一人は同じサッカー部でネバダ大学に留学していた人、もう一人は熊本で実習をしていた人）と、人づてに自分たちの話を聞いた禅道場の師範代との独身4人での農業が始まった（禅道場の師範代は1年半後、玄米作りを極めるため和歌山へ移った）。当時大阪にいた妻を呼んで、結婚した。これからはイヨカンの時代という言葉にだまされ、2町歩もイヨカンに切り替えたのに、イヨカンはさっぱりだし、ちょうど大寒波も来て、途方に暮れていたところに、有機農業という言葉と出会う。最初から、食べるものと出荷するものの作り方が違う農業に違和感を感じていた。お金のためでなく、暮らせればいいのだからと、有機農業に方向転換をした。ほとんど自給自足の状態。野菜は旬のものを作れる限りいろいろ作った。鶏を飼ったり、ヤギを飼ったり。キウイフルーツや梅や、栗も育てた。結婚して2年後土地が値上がりしてくる。3、4件の農業用の土地を取得することが困難になる。大洲や新宮などもあったが、1人はH市で土地5反を手に入れ、「自給の村」というのを作って、今も松山に販路を持ちながら続けている。もう1人は、ため池に娘が落ちて死亡する事故や、ゴルフ場の土地売買の問題等があった、離農し、地元に戻っている。

登記していた5、6反の土地があったため、自分たちはここに残った。共同体志向は興味がなく、元々

単独で好きなことをやりたかった。鶏、野菜、果樹の経営をやり、鶏が日当、果樹はリスクはあるがボーナスという感じ。年収7万の頃があり、税務署が怪しんでいた。今はI市（10件）とN市（21,2件）にそれぞれ、火曜、金曜と週1回ずつ野菜を配送した後、それぞれのリサイクルショップで1,2時間店長代理をしている。反原発運動で知り合った人が店長をしている。教育費のために始めたアルバイトではあるが、生活にメリハリができるし、読みたい本は（店にあるので）買うことはほとんどない。中古の電気製品などが安く手にはいるし、今の生活にかなり貢献している。

地域のグループ活動について

反原発運動は伊方原発の反対運動で1985年から89年ぐらいまで活動していた。今はそれぞれ別の運動をしている。それ以外には有機農産生協にも関わっているのと、TYC（T町ユースクラブ）。TYCは地域の若者塾に県の予算がついて平成元年にできたもので、入るように言われて入った。メンバーは17,8名いるが、イベントによって7,8人ずつ参加している。文化会館のボランティアスタッフ。近頃は会社を創ろうかという話がある。TYCだけでなく他のグループも含めて。しかし、このところ会社設立に対して書類の書き方が悪いとか目的が怪しいとか、何かとたたかれる風潮があるので少し時間がかかりそう。TYCは地域にとって威圧団体的存在。地元の人には代表にはなりにくい。

自分はそういう団体活動が好きなわけではない。学生の頃からノンポリだった。活動は面白そうなのを選んで参加している。おいしいとこ取り。面白いの基準は、歌えるとか、自分が何かふっかけることでみんなが踊ってくれるとか。若い人がいること。自分より年上の人の前で話（講演）はしたくない。地域の組織は消防団や農業後継者の会で月1回の割合で集まっている。地域に役立つ活動は苦痛ではない。実際出火は2件ほどあった（2件とも消防団の家）。家を建てたりするときにはみんな集まる。

今来ている研修生の一人は、37歳の男の人で、地元のいわゆるエリートだったが、大学の時に変な宗教に入って、精神病院に行くまでになってしまい、文化会館から（面倒を見てくれと）頼まれて、T市から来てもらっている。

何かイベントをすると名刺交換をする。地方で演奏をやりたがっているアーティストは多い。それらの人々と話をしながら自分の方がまともだという安心感を得ている。

「ちろりんだより」は家族や友人、地域おこしグループなどに配っていて、口で近況を報告するより楽だから始めた。300部発行しており、17年で現在89号。

野菜を配達しているグループを通じて医療生協と生協の雑誌から原稿の依頼があり、月々1万弱の収入を得ている。銀行振込のため妻にすべて取られているが。

妻について

出身：神奈川県Y市

年齢：43歳（昭和29年2月生）

略歴：東京都N区（4歳～9歳）

兵庫県N市（10歳～12歳）

大阪府H市（13歳～26歳）

大阪女子大英文科卒

学生時代

合気道をしていて、師範から自然の話やヨガの話などを聞いていた。（今の暮らしに）その影響はあった。四国は旅行で来たことはあるが、香川より東にしか行ったことがなかった。

T町について

小さい頃都会に住んではいたが、都会と言ってもまだ田圃や畑は近くにあり（大根も栽培されていたし）、田舎と都会の要素は半々ぐらいある。T町に関してもそういう意味では全く抵抗はなかった。

生活について

生活に対する不安は感じない。収入がないのがいいと思った。今までまともな人生を歩んできたので、これからは面白い人生を歩んでみたいと思ってここに来た。

有機農業について

元々消費者であったので、安全なものは食べたいという思いはある。世の中の流れもそうになっている。自給したいというのがあって、その中で余ったものを売るという考えだから、収量もほとんど気にしなくていい。そんなに手間もかけていない。

農業の経験

大阪で勤めながら、（彼と）結婚するという風に意識した頃から、少しは農業らしきことをやっておこうと、市民農園を5坪借りて野菜を育てていたことはある。

農業に関しては、主人に従っている。

地元の人との関係について

初期的には特別な目で見られていた。子供を通してつながりができた。いろんな意味で「子はかすがいい」。

家を建てるときにも近所の製材所に材をもらったり、倉庫のためにいらない鉄骨をもらったりして、400万で済んだ。建前まで自分たちで建て、棟梁も素人がやっていたが、うまくいかず、結局本物の棟梁が見に来たときに、酒1本で交代して手伝ってもらうことになった。

方言は多少関係するかも知れない。関西人にとって四国（高知を除く）のイントネーションは親近感がわく。言葉の柔らかさがある。よそ者という疎外感については、街の方が疎外の塊。

自分たちが来て何か変わるかについては、例えばPTAにしても、もうできあがっている何かがある。

（談合と結論ありき。：夫談）異論は最初から想定してない（そういう意見もありますね、で流される）。一人で何かしようというのではなく、まず地域でグループを作って広げていく方がいい。本当は（地元の人も）みんな感じていることで、口にしないだけということも多い。

収入について

農産物収入は月20万（夫による配送分+妻による配送分。但しこれは他の人の分の野菜も含まれているから、N家の分は12,3万）。

税務署の人に申告するときは、支出は固定資産税+住民税ぐらいで、新聞代や電話代、ガソリン代等の経費はカットして申告している。本当はこれらも減税したければ申告して認めてもらえる内容。しかし、これらまで正確に申告すると、税務署が（この収入で生活できるわけがないと）怪しむのでそういう申告になる。これが農業の不思議なところ。

自給自足で賄えない部分を物々交換で補うことによる。自分の所の卵とよそのお米を交換するときも、卵10個とお米1kgが同じ価値とその人が思えば、それで物々交換は成立する。お金で計算することはできない。鶏の飼料も卵で手に入れている。

夫妻への質問

< I ターンの人が来たらどう思うか >

サラリーマン並の所得がほしいとか、年収を100万上げるとかその人がどの程度に（所得レベルを）

規定するかによると思う。農業でもうけたいと思っている人は、かなり難しい。あんまり儲けようとする人たちは自分たちとは合わないのではないか。

<労働時間>

1日8時間くらい。但し効率を上げれば2時間ぐらいで済む仕事。農業は働けば働くほど忙しくなる。忙しくして収益を上げるよりも、食べてさえいければいいと、のんびりやる方を選ぶ。

<今来ている研修生について>

今は2人いて、もう1人は37歳の看護婦さん。赤痢の病棟にいたので、5、6日に1回しか仕事がない。暇なので来ている。2人とも偶然今年の9月から来っていて、月、木の2回。ただ草引きに来ているだけ。ぼーっとしに来ている。一種のセラピーだろう。彼女の家は農家らしいが、父親が（土地を）好きにさせてくれないようだ。

主食の米が安くなってるような日本で今までの農業はできない。ハーブや地酒などもやらなければ乗り切れない。サラリーマンもゆらぎがある。親が自信を持って、「～をやれ」とは言えない時代。彼らにはお金をもらってもいないしあげてもいない。ただ働いてくれたらいい。いろいろやりだしたら切りがない。

きちんと就農したい人は、肱川の皆農塾や、明浜の無茶々園で研修を受けている。かえって農業を知らない人の方がうちには合っているのでは。

オーストラリアの姉妹が来たこともあった。オーストラリアの有機農業の種（オックスハート）を持ってきてくれた。蒔いてみたが、いまいちだった。

<定住促進のための補助金等がある自治体を選択するか>

補助はない方が楽。あるとかえって拘束される。行政は情報（空いている物件や、売りに出されている土地などの）だけを提供してくれればいい。

<地域の会合への参加>

中学生になって次男が鶏の世話をできるようになってから、ようやく夫婦で外へ出ることが出来るようになった。最近フロンティア塾に夫婦で参加した。

地域の会合の中では「人の不幸は蜜の味」で、「あの夫婦は危ない」とかいろいろ言い合っている。ただ本当に深刻な内容の場合、（会合で）話は出ない。

<中山間地域の特色として夫婦仲がいいと言えるか>

一緒に農作業をしている夫婦の場合は言えると思う。

TYCをきっかけに夫は変わった。（妻）

いろんな人に会うことで、あれもしていい、これもしていいという幅が広がって、いろんなことが出来るようになったのかも知れない。（夫）

最近は大手スーパーFが主催している「遊民館」という登校拒否の子供たちが集まる施設を訪れたりもしている。（夫）

農山村として理想なのは、スペインの田舎町。あそこの人々は接待したくてたまらないという感じで、訪れた人をもてなす。それぐらいのもてなしができるようになりたい。

<グリーン・ツーリズムについて>

日本で導入すると、ゆがんだ形になると思う。グリーン・ツーリズムはプライドや生き甲斐を戻す一つの方法。日本では民宿の拡大版になるだけだ。

<子育ての方針>

分相応に育ってほしい。(妻)

どこで何をするにしても、これからの世の中で食べ物を作る技術は大事。それだけは身につけてほしい。別に農業を継がなくてもかまわない。本当の知恵は自然とどれだけ接することができるかにある。

(夫)

<両親の反応>

平成元年に両親がT市に移り住んだ。自分は一人娘だし何かと心配だから、一緒に住もうかという話をしていた。そうしてしばらくしたら、「そっちに住みたいから住む家探しといて。」と言われた。もともと転勤族だから、移住することに抵抗はないようだ。隣の市だから何かあったときに、以前よりは安心。父親は73歳で、母親は67歳。(妻)

うちは父親が67で母親は66。母親は「パチンコと麻雀の出来ないような所は嫌」と言って、来ない。97歳の祖母は10年前に1度来たことがある。家を建てたとき、「ここがうちの土地だよ。」と言うと、「ここがねえ。」と言いながら裏の山も含めて回り一面見渡していた。昔の地主の感覚で、一帯すべて孫の土地と思ったのだろう。そのまま黙っておいた。(夫)

<酒造会社のガーデンとの関わり>

ハーブガーデンを担当している。ガーデナーの資格はないが、その辺のガーデナよりも、知識はある。オープン前から社長(55,6歳)とは知り合いだった。酒がまずいという手紙を書いてから。その後日本酒についていろいろ話し合う仲になった。(夫)

<地域の人々との関わりについて>

儲かる農業をしていれば、関心を持って参考にしようというふうを考える人は多いかも知れないが、自分たちの生き方自体が「儲けよう」ではない。普通の基準は、体をこわして価値観が変わったというような人以外、「お金になるかどうか」だ。年代が上の方は面白い変なことをしているという目で見ています。若い人の中でもリハビリ目的の人や人生を別の角度から考えたい人たちにとってはいい。

(夫)

<農業をしたいという人が来た場合>

来ても積極的に何かを教えることはしない。ただ作業をしてもらうだけ。10年ぐらい前の方が農業をしたいと言ってくる人は多かった。今は行政が拾い上げるシステムがある。当時は情報不足で、少ない情報を必死で集めながら模索していた時期。

<海外から来る人>

P H D (Peace・Health・Development) 協会。その国に適した開発支援を行う協会。

長男について

出身：T町

年齢：16歳(昭和56年12月生)

略歴：地元中学校を卒業後、現在愛媛大学附属農業高校在学中

愛大附属農業高校に入った理由

農業がやりたかった。そのためには施設のいいところがいいと思った。

高校で今していること

1年生だからまだ農業基礎。剪定や摘果、肥料蒔きなどの実習。

両親の農業の手伝い

キウイの収穫やトマトの支柱立て、鶏の世話など(母がけがで入院した間)をやった。

面白くない。親の苦勞が分かった。大変なことをしているんだなと思った。

周りの子は、普通に野球などをして遊んでいた。

大変なのにやってみたい理由

どの仕事もそこそこ大変。

動物や虫について

動物は好き。虫に関しては好きというほどではない。クワガタを1年飼うくらい。

将来について

親と近い感じの農業を、ここくらいの山に囲まれた場所でやりたい。

父親のたくさんの知人の話について

聞き流している。

父親のように人が集まる場を持ちたいと思うか

集会所は持ちたいとは思わない。

カナダ旅行について

中3の夏、2週間、観光と日常会話程度の語学研修を目的に弟（当時中1）と一緒にいった。父親の知り合いのついでで参加。旅行の費用の70万は高速道路の関係で臨時収入があり、それを当てたらしい。ホームステイ先は兄弟別々で、兄はオランダ移民の家だった。弟はフィリピン移民の家で、いつもパーティーばかりでとてもにぎやかだった。「それぞれの性格にあった家だった」（父親談）ようだ。本当はファームを希望していたが、バンクーバーは街に近く、無理だった。海沿いなので釣りをよくした。丹原でも釣りはしたことはあった。感動したのは、吊り橋を見たことと、野生のリスを見たこと、それと、食生活の違い。鮭の薫製やパンばかりだった。パンが続くのは平気だった。

地元の友達の進路

コンピューターをやりたいという人もいたし、プロゴルファーや野球選手を目指す人もいた。大体は地元の高校か隣の市の高校に行く。地元高校には普通科と園芸科学科がある。

今行きたい所

オーストラリアかニュージーランド。日本より先に外国に行きたい。

松山は都会と思うか

都会とは思いますが住みたいとは思わない。便利じゃない。地元の方が便利。

体力について

自信がある。1500m 4分台で走る。（中学の時野球部の先生が陸上の先生だったため、基礎体力を鍛えられたらしい：母親談）今はバスケをしている。

将来農業をやりたい場所

ここ以外で人がいないのんびりできるところ。

11) K夫妻

現住地：K町

家族構成

夫（52歳）妻（49歳）長男（Uターンの意志あり）、長女（東京）、次男

夫について

出身地：宮崎県N市

前が海で裏には山があるような自然に恵まれた場所（漁港）実際に農業をやったことはない。かえって田舎に対して楽しい思い出しかなかったのが良かったのではないか。

移住前の居住地：東京

中学2年の時に東京へ移住。以後東京で結婚し、37歳までサラリーマン生活を送る。

移住のきっかけについて

次男の病気（気管支）のため。医者に障害者学級に入るか、転地療養をするかどちらかだと言われ、田舎で暮らすことを選んだ。

移住地の選択

候補地はいくらかあった。具体的には東京近郊で、埼玉県秩父市、千葉、静岡、長野、三重。当時妻が通っていた調理師学校の四国出身の知人の紹介で、O町に決定した。

移住の際の周囲の反応

親戚兄弟の反対はあった。伊予商人の土地、草木一本生えない、水がないという噂、何もないところ（マッチもないのでは、とたくさん持たされた）など。自身も床屋がないだろうとバリカンを持ってきた。

職業について

山師のK氏のもとで、山番頭を1年半やった後、道路の側溝掃除や林業施業（下刈り、枝打ち、椎茸のホダギ用のクヌギの伐採・搬出等、谷底の木を伐りだして「背負いこ」で運んだりもした）。山仕事は初めのうちはおもしろい。年寄りの技を見たり、知恵を聞いたりして感動できる。しかし3ヶ月もするとネタが尽きて飽きてしまう。山仕事は重労働で疲れる。自分の山なら良いが、日雇いでは何も残らないと思った。

木の仕事がやりたかったので、家具でもつくろうかと考えていた。が、木があばれたり割れたりすることを知って、あまり大きな物は作れないとわかり、小さな物なら作れるのではないかと思った。新聞で木地師のSさん（当時松山在住）を知り、訪ねる。彼も独立したばかりで、弟子はとれなかった。そこで、ただ彼のもとに通い、作業工程を見たり、掃除をしたりしながら、作業を覚え、実際にやらせてもらって、技術を習得していった。

手仕事はお金にはならない。数が限られる。作れても最高で1日10個。毎日出来るわけではない。木を引っ張ってきたり、漆を塗ったりする日もある。そうすると、ろくろをやれるのは月半分。ろくろも1日2時間くらいしか出来ない。腱鞘炎や白蟻になる。失敗して、材料がろくろから飛んで、頭や身体に当たったりもしていた。そんなことがあると1週間は怖くてろくろの前に座れなかった。

木を伐ってみると虫に食われていたり、節があったりして、実際に製品になるのはわずか。野菜作りや山菜取りも含めて全てで生活している。38歳から始めることが出来たのは、後には引けない状態だったから（他に仕事を選ぶことが出来ない）。父や兄が器用だったが、自分は小さい頃から不器用だった。しかしやりだしたら、人間そんなに差はない。要はやる気の問題。

住まいについて

O町には7年間住んでいた。貸家。10坪の離れを自分たちで造った。

工房を建てるために、K町へ移った。K町の役場に知り合いがいて、土地を探してもらった。地主（O氏）との仲介役もしてもらった。現在の土地は借りている。

家は建前の状態まで大工に建ててもらい、後は自分たちで建てた。完成まで1年ぐらいかかった。ただし、今でも完全に完成しているとは言えない。床暖房にするため、パイプを床下に通して、ボイラー

をトイレの方に集中させているが、そのためにトイレの床が張れず、ずっとベニヤ板だったりしたし。誰かに作り方を教わったというのではなく、本を見たり、いろんな家の造りを見たりして、実際に造りながら、試行錯誤の上に、出来た。柱も角も直角ではないということがわかった。

考え

子供の健康状態が良くなってきたことが励み。

自分と波長の合う人間というのは、住む場所に関係なく、そんなにたくさんいるものではない。それは仕方のないこと。最初は田舎の遅れている部分（例えば農薬の大量使用とか）を指摘していた。しかしここではそれは大きなお世話。自分が言っただけで変わるようならとっくに変わっている。声を大きくしても変わらないなら、自分がいろんな行動を起こすことから始めればいいという発想に切り替わった。例えば、ここの生態系にあった動植物を増やしたいと思えば、在来種のメダカでもつがい池で飼育すれば、あっという間に増える。実際11匹しかいなかったタナゴを数百匹に増やした。自分たちだけでもと思ってやっていけば、いずれ賛同者は出てくる。

会合

こちらの生活で驚いたのは会合の多さ。いろいろ会を掛け持ちさせられた結果、三日に一回は会合があるようになってしまった。子供を育てに来たのに、それがおろそかになってしまった。組の常会は全て辞めることにした。

妻について

出身地：福島県S市

畑がたくさんあり、川釣りが出来るくらい自然に恵まれた場所。6歳まで過ごす。

移住前の居住地：東京N区

大根が栽培されていた程だから、当時はそんなに都会ではなかった。転居後、すぐに父親を亡くしている。25歳で結婚。2男1女を出産。34歳で家族と共にO町に移住。農業の体験はない。

移住前の生活

一人病人がいるだけで、家が暗い雰囲気だった。どうしてこんな子が産まれたのかという思いがあった。毎日病院通いの日々。いろんな病院に行った。いろんな医者があることがわかった。（薬を大量に投与してみたり、障害児保険の取り方の指導を受けたり。）次男に掛かりきりになることで、上の2人の子供が、寂しい思いをして、欲求不満になったりした。

主人は、会社から疲れて帰ってきて、暗い話題（病状について）ばかりで、さらに家族みんなが次男がかわいそうだからと静かに過ごしている状態には、耐えられなかったという。元々、家に帰って運動してからでないとご飯が食べられないほど、胃が悪かった。あのまま東京にいたら夫婦も家族もおかしくなっていたのではないかと思う。夫婦二人とも田舎の良さは知っていたので、年を取ったら田舎に行こうという話はあった。だから田舎に住むことに迷いはなかった。逆に年を取ってからだとパワーがなくて出来なかったと思う。

仕事について

O町で畑作りを覚えた。播種の暦を見るよりも、地元の人が、ネムノキが咲く頃とか、小豆の高さがこのくらいになったら、何をするとかいうような情報の方が正確で役に立った。当初は月5万円の生活で、東京の家族や友達からの援助があった。

木工を始めてからも、最初のうちは売り物になるようなものがなかなか出来ず、東京の友達や家族に食器を安く売っていた。

本の印税は24万程入り、かなり助けられた。

実際生活費として月20万あればいいから、木工での売り上げは年間300万が目標。後は、育てている野菜（今現在は、白菜、大根、ネギ、玉葱、ハヤトウリ、ピーマン、アスパラ、キャベツ）や銀杏、キノコを拾ったり、保存食（ゼンマイ、筍、椎茸、スギナ←お茶）で暮らしていける。

地域の人々との関係について

かつて町でのつき合いで、消防団、常会長、センサス委員、青年部部長、PTA、婦人会、公民館運営委員と最高7つの組織の会合に参加しなければならないことがあって、それに加えて、お葬式や公民館行事（敬老会、運動会、草刈り、納涼会等）があると、自分たちの時間がほとんどなくなってしまったことがあった。

会合には夫婦で参加する。地元の人たちは子供を見てくれる親がいるから、安心して家を空けることが出来るし、かえってこういった会合で羽を伸ばせるような感じの所があるが、自分たちの場合、他に頼れる人もいないし、分からない土地ということもあって、かなり苦労した。今では会合などのおつき合いは、全てお断りしている。昔は断ることが出来なくて、つい全部引き受けてしまっていた。こういう（拒否する）態度を地域の人たちはあまりよく思っていないかも知れない。しかし、地域に対して何らかの貢献はしたいと思っているし、それが分かってくれる人が何人かいれば、それでいいと思っている。

過疎について

若い人たちがなぜ帰ってこないかといえば、理由は2つあると思う。地元のお年寄りなどを見ていると、あまり楽しそうに仕事をしていない。そして、働いた分の収入が得られていない。彼らは自分たちが使う分でなく、子孫に残す財産のことを考えていて、その財産のスケールも大きい。

自分たちはそういう（資産を蓄えて残す）ことは考えず、循環させることを考えている。だから負担感もなく楽しい楽しいと言って生きてきた。そういう姿を子供たちは見てきたから、長男も次男も帰ってきたいと言っている。ただ、娘は東京の暮らしが楽しらしく、こっちには帰ってこないと言っているが、それはそれでいいと思う。向こうで才能が認めてもらえて、いい仕事ができているのだから。私も東京に住んでいたときは、東京が楽しかった。いろんな山にも登ったし。今はここにいるから、ここが一番と思っている。私は夫がいればどこでも生きていけると思っている。水上勉の本の中に「随所作主」という言葉がでてくる。この言葉に尽きる。

植物や宗教についての考え

こういう暮らしをしていると、生命をいただいていると強く感じる。

無信仰者ではあるが、他宗教を批判するような宗教は違うと思う。それぞれの宗教を持って、それぞれの神に対して祈っている姿を見ている神はいると思う。農家の方がよく太陽やいろんなものに対して手を合わせているが、あの姿ほど美しいものはない。

子育てについて

今は次男のおかげで、愛媛に暮らすことができ、いろんなことが見えてくるようになったと感謝している。例えば子供について心配することは親の欲であるということが分かった。次男に対しても「この子が結婚できなかつたら」とか、「一人で生きていけなかつたら」と心配し始めると尽きることがない。子供を殺す親の気持ちも分かる。けれど自分たちが死んで次男が死んだら、それはこの子はそれまでの命だったのだと思える。周りの植物や動物たちの中ではそれは当たり前のことなのだ。そんな心配のために今の喜びを見過ごすことの方が不幸だ。

次男が工房で箸置きを作れるようになったときに、この箸置きを1日10個作らないと採算が合わないからと、主人が次男のペースの遅さを怒ってしまったことがあった。主人が怒ったのは、彼が生きていくための術として、それだけの技術が必要と思っての、親心からだ。それを見て、「この子がこれを作れるようになっただけでもすごいことじゃない。そんなに怒ったら萎縮してますます作れなくなってしまう。この子が食べていけなくて死んでしまったとしたら、この子はそれまでの命だったということ。」と話したら、主人も納得し、楽になったと言っていた。

夢について

自分の子供のように他の人たちも元気にしてあげたい。友達に、死の6ヶ月前でないと入れないホスピスの看護婦をしている人がいる。その人が患者さんに生きることの楽しさを教えてあげたいと言っている。彼女とも協力して昼だけのレストランを始めて、ここにある材料、ありのままの野菜を出したい。食器にはうちで作った木の器を使う。もし調理師学校に行っている娘が帰ってくれば、一緒に働くこともできる。長男も帰って来る（湯布院で木工の修行中）から、みんなで楽しくできると思う。

12) M. S氏

現住所：H村

年齢：33歳（昭和38年11月生）

出身：広島（小3から松山市）

家族構成：夫（32歳）、長男（小4・9歳）、長女（5歳）

略歴：高校（女子高）卒業後、バスガイド（1年）、歯科受付（3年）勤務後、結婚。

その後パート的にスイミングのインストラクター、生命保険のセールス（3年）、出産後、魚市場、再度スイミングインストラクター、着物の着付け等。

平成6年2月に離婚

4月にH村に移住し、留学センターに給食婦として勤務（2年）

その後、寮母として勤務（1年）

平成9年3月に再婚のため、山村留学センター退職

現在、花卉農業に従事

前住所：松山市

H村に来るきっかけ

山村留学に子供を行かせていた友達の紹介で、留学センターの給食婦に空きがあることを知り、面接を受けに行った。子供も小学校にちょうど上がる頃だったし、離婚もひとつの引き金にはなっている。

農山村に住むこと

抵抗は全くなかった。アウトドアやキャンプが好きだった。ひょっとして農山村に住むかもしれないと思ったのは、20歳ぐらいの頃。

趣味について

ショッピングもするし、スキューバーやトライアスロン、サーフィンもするし、キャンプもよくしていた。スポーツ全般。なんでもする。

周囲の人の反応

やめた方がいい。何でそんなところに行くのかと言われた。両親も賛成はしなかった。H村に遊びに来るが、最初は来ても「つまらない」と言っていた。最近は慣れたようだ。

住まいについて

村営の後継者住宅。面接の時に紹介された。本当は母子家庭はいけないらしいが、自分たちが入る1年前から空き家だった。全部でここには7戸建っている。全部一緒に建ったわけではない。現在一戸だけ空き家。平屋で家賃は月に1万3000円。3DK。

夫の実家で暮らすという話もあったが、夫の両親が自分たちもまだ元気だから離れた方がいいと言ったので、後継者住宅に私が住んでいたから、そこに住もうということになった。

後継者住宅というのは、そういう、実家もあるが両親とは離れて暮らすという人が多い。Uターンの人のためというのもあるが、Uターンは1件だけ。あとはずっと地元にいる人。役場に勤務している（3人）。奥さんは地元の人の場合もあるし、保母さんをしていて、青年団で知り合って結婚というのもある。

仕事について

仕事は外に出たり、人に会うような、特に子供相手のものがよかった。事務は嫌だった。3月（平成9年）で寮母は辞めた。現在は農業。

収入について

山村留学センターで働いていたときの収入は、松山とそんなに変わらなかった。収入の割に支出が少ない。家賃も安いし、光熱費も冬にかかるだけだし。

支出について

あまりものを買わなくなった。こちらに来て一番変わったこと。欲しいものがなくなった。松山では街に出たら、買おうという感じだったのに。

せっかく山に住むのだから、テレビは持ってこないでこうと、松山では1日中見ていたテレビを、最初1年半は持ってこなかった。いろんなものがなくても生きていけることがわかった。喫茶店がなくてもやっていける。不便なところでも十分生活していける。それが苦にならない。子供は見たがっていたがセンターの方も幸い午後7時から8時の1時間しか見せなかったため、テレビの話題が（子供たちの間で）ない。地元の子が8人でセンターの子が20人だから。テレビゲームもないし、ゲームボーイもないし。そういう話で仲間外れにされることもない。

H村について

<満足な点>

不便なところがいい。何もないところが。松山では分からなかったが、夫婦の中が非常にいい。田舎は夫婦で会に出席しないとやっていけない。人数が少ないから。学校のことにしても何にしても。農業等で一緒に仕事をしていることも大きい。

<不満な点>

最初は受け入れられにくい気がした。地元出身の夫と結婚してから受け入れられた気がした。（夫は1年ぐらいでとけ込んでいたと言うが。）地元の人と結婚して身内のように思ってもらったのでは。結婚後は名前前で周囲の人に呼ばれるようになった。奥さんのことはここではみんな名前前で呼ぶ。村の行事ごとにもたくさん参加するようになった。組のつきあいに参加する機会も増えた。PTAは以前からあったが。それまでは趣味やサークルの範囲でのつきあいだった。組つきあいで今まで話をすることがなかった人たちとも顔見知りになる機会が持てた。

買い物について

生協。コープえひめの宅配（共同購入）がほとんど。あとはJAの支所で少し購入。地元の人は自分

で作った野菜とJAの利用で済む。だから生協は若い人が中心。

共同購入では、肉、魚、調味料と食料品中心。日用品も買える。野菜は自分の家（夫の実家）のもの。大型の家電はほとんど持っていたもの。小さなラジカセなんかは生協でも買える。服も通販で買える。わざわざ松山へ行くことはない。せいぜいI市。CD、本等も欲しいものが出たときに、まとめて買いに行く。

H村の外に出る頻度は1ヶ月に1回ぐらい。多くて3回。本当に用事があるとき（会議や人と会うなど）に出て、ついでに買い物をする。出ないときは1回も出ない。月4回は周囲の人も出てないだろう。不便さは感じない。生協で十分。

農作業について

昔（結婚前）はほうれん草を作ったり。道を歩いていたらキュウリ等をもらったりすることもあった。今は義母が作る野菜をもらっている。夫が専業農家で花卉栽培（トルコキキョウ、ストックなど）をしているので、その手伝いをしている。

地域のつきあいについて

青年団、消防団、婦人会、PTAがある。ここは全戸がPTA。お年寄りもそう。案内は全て出す。組の行事は地区のみ。地区の中で6組ある。それを大きく分けて1組、2組というのものもある。月に1回常会がある。バレーボールなどの村の行事は、地区の1組、2組単位で参加。常会は6組単位。公民館はS地区にある。案内があれば出ていくことはある。

サークルは、バドミントンやバウンドテニス、バレーボールがある。公民館で英会話もしている。外国の人が来て、夜に教室を開いている。その人が学校にもまわるし、村の行事にも参加する。公民館に派遣されている人。

体を動かそうと思えばできる。規模は別にして。焼きものもやっている。もう少し高度なものを求めれば、I市、T町に行けばいい。

図書館は公民館に小さい規模のものがあて、そこで十分。本当はスイミングなどにも行きたいが、そのときはI市まで行けばいい。順調にいけば40分くらいで行ける。

時間の使い方について

農業をしてすごく変わった。自営だから時間的には自由にはなるが、朝から晩まで追われている状態。初めての農業ということもあり、初めてのことばかりで自分の時間を持つゆとりがない。

こちらに来て最初の頃は、時間が長く感じた。だからといって退屈でもない。本を読んだり、手紙を書いたり。寮母という仕事は夜の仕事でもあり、不規則だが、それでも、子供の相手をする時間もあつた。テレビがないことによって、短いけれども深くつきあえる。松山では時間は長くてもどうでもいい相手しかしていなかった気がする。

子供の教育について

来た当時、下の子は2歳半。ここの保育園は3歳からしか入れなかったのて、センターに連れて行っていた。朝6時から連れていったりしていた。センターの子供同然の扱いだった。

（ここは中学校までしかないが）高校はいけるところにいけばいいと思っている。塾やピアノや、スイミングに松山まで行かせている人もいるが。家庭教師を雇っている人もいるし。先生にきちんと教えてもらえばそれでいい。H中は今全校で30人。これからはもっと少なくなる。だから、クラブ活動はやりたいことができない。ソフトとバレーしかない。サッカーがやりたいとすれば、街のそういうクラブに入らなければいけない。ただ、この辺を走り回っていれば、運動にはなると思う。

今後のことについて

これからここに住つといる。結婚しなくてもここにしようと思っていた。

医療についての不安はある。ここは診療所しかない。

下の子が小学校に入る頃はもっと子供が少なくなる。留学センターがなくなれば、3、4人しかいない。それが不安。

山村留学について

<目的>

H村には3校小学校があつて、T A地区に10人、S地区に30人の児童がいたが、T I地区は3人しかなくて、T I小を存続させるために、というのは強い。

<地元の反応>

T Iの父兄の反対もあつた。どんな子がくるか分からない。センターが施設になるんじゃないのか。いらぬという声もあつたようだ。その後話し合いや見学を経て決定した。

<留学した子供たちについて>

1年生から6年生までいて、5、6年生が多い。県内が3分の2。

1年経つと変わる。集団生活を通して自分のことは自分でできるようになる。強くなる。はじめは泣いてばかりで、お風呂ひとつ入れないような子が、変わっていく。都会に帰ると元に戻ってしまうが、何かは残る。夏休みに家に帰ると、「別人のようだ」という母親も多い。親から切り離されるということは大きい。指導員4人に対して子供は20人~25人。一人ずつにかまってははいられない。だから自分のことは自分でできるようになる。みんなで一緒にご飯を食べていると、嫌いなものがあつても、友達がおいしそうに食べているのを見ると食べてみようかと思うようになる。靴下を洗ったり、布団をしまったり。している家庭ではしているが、してない家庭の方が多い中で、最初は嫌々だが、最後にはして当たり前になっている。留学する子に共通の特徴というのは特にない。

途中で帰ってしまう子はいる。今年は2、3人いたらしい。それまでは余程体が悪い子くらいだったが。本人がすごくいやがついていて、もうだめだという子は、最初から続かないと分かる。

留学が終わってから来ることもある。運動会や子供の日祭りなど。沖縄からも来る。行きたいと本人が言うらしい。ここにいたときは、ゲームもないし、母親にも会えないし、帰りたいと言うが、家に帰ると懐かしいらしい。

<指導員について>

交代で一人宿直。9時に消灯。地元職員なので何かあると駆けつけられる。

寮長は現在3人目。以前はT A小で校長をしていた人。寮母は私が辞めてから2人目。1、2年で変わる。寮長も長くて3年。その前は1年単位で変わっていた。

<山村留学の決定>

最終的に子供が納得しないと続かないが、たいていは親。自立させたいとか、環境のよいところで生活させたいとか、末っ子で甘えているからしっかりさせたいとかそういう理由。

<留学生の親について>

里心がつくのであまり最初は会わせたくはないが、学校行事で月1度は来る機会がある（運動会や参観日等）。宿泊は交流の宿やT Iの集会所（布団持参）。留学期間が終わってからも、子供と一緒に来ることもある。地元の父兄と仲がよくなって。3年前の方々ともおつきあいは続いている。

（留学に）お金はかかるが、特に余裕のある家庭というわけでもない。普通の家庭だと思う。母子家

庭もあるし。

<地域行事>

地域の人が協力的。行事にも参加している。

<問題点>

センターの方針と親の方針とのくいちがい。親の中には、のびのびだけでなく勉強もさせて欲しいとか、自分が仕事が忙しいからここにやっているんだとか言う人がいる。子供がここでごんばろうという風にならないため、足を引っ張る。

センターと親との話し合いがあってから来られればいい。村（行政）とセンターと親がばらばら。それぞれの目標が違う上に、一堂に会して話し合う機会もない。親は教育委員会に話を持っていくこともある。行政が入っている分、改善しにくい。

職員に役場の人もいる。その人はほとんど役場に行くことはなく、センターにいたのでセンター独自の考えになる。現場には現場の考えがあるので。

<改善のために>

山村留学自体はいい。村とセンターの話し合いをまずきちんとするべき。

<移住について>

松山出身の人でSさんが家族で移り住んでいる。

Oさんという人は、子供が6年生になるまでいて、U町に帰った。

留学中に、住みたいという母親は多いが。実際住むまではなかなか。条件はまず、家で、次は仕事だと思う。こちらに来たいという人はここにある仕事でもいいのでは。役場や林業会社など。N町やT町にも働きに出ている人はいる。住宅があればI市でもN町でもT町でも通勤は可能。あとは学校の人数が問題になる。競争心がなくなるとか、いきなり高校で大規模校に行って大丈夫か、とか。

若い人は増えて欲しい。減る一方だし。帰ってくる人は少ない。

<学校について>

学校の先生は若い人が多い。夜7時ぐらいまで一緒に遊んだりしていて、子供たちとのつながりは強い。今は新しい人ばかりで分からないが。前任の校長、教頭は、たまに様子を見に来たりする。

学校とセンターの話し合いもない。全寮制といっても、センターは学校の付属ではない。

13) K氏

現住所：S町

年齢：49歳（昭和23年10月生）

出身：大阪市

略歴：会社（サービス、運輸、倉庫関係）に勤めていて、今のご主人（S町出身）と出会う。

結婚（24歳）後、K市に移住。（15年間）

平成5年4月からS町に移住

家族構成：夫（S町出身）長男・次男（双子）24歳→大阪在住

長女19歳（高校）、義父78歳、義母74歳（病気）

S町に移住したきっかけ

長男だったので家に帰らなければいけないとは思っていた。義母の病気のこともあった。C社ができたのが直接のきっかけ。

住まいについて

大阪にいた頃は社宅で、下が営業所だった。夫の通勤は勤務地がいろいろ変わったこともあるが、近くて30分、遠くて1時間。住居の1階の営業所に勤めていた期間はかなり短い。6畳2部屋と4畳半の3DK。

現在は夫の実家に住む。6畳2部屋、4畳半に10畳の部屋があって4DK。昔の農家建築で畳自体が大きいので、今の部屋に換算したら畳の数はもっと増えると思う。ここでは若い人が住む方を「母屋」と言って、隠居した年寄りが住む方を「部屋」と言う。自分たちが来るときに戸をアルミサッシにしたり、茅葺きの屋根を瓦に直したりといった改修はしている。

仕事について

大阪では専業主婦だった。こちらに来てからはC社の検査部門で働いていた。内容は流れ作業。昨年（平成8年）の4月からロッジで働き始めた。夫の同級生で、温泉の受付をしていた人の紹介。ロッジで働いていた人が高齢のため辞めるから、代わりに入ることを勧められた。昔から海か山でペンションを経営してみたいという夢があって、それがかなった感じ。勤務時間は朝6時から晩の11時までで、休みは週1。ほとんど住み込みで働いている。

忙しいときには夫と娘が手伝ってくれる。夫もC社で働いていて、3交代で夜中の12時から朝の8時まで仕事のときは、仕事から帰ってきてすぐに手伝ってくれたりする。料理をする時間もないので、義母が作って持ってきてくれる。

収入について

3分の1に減った。娘は高校に入ったばかりでN町に下宿させなければならなかったし、次男は大学生で仕送りを送らなければならなかったの、働かないわけにはいかなかった。

自分の収入をプラスしても10万少なかった。大阪の会社を辞めた退職金を当ててきた。

買い物について

日曜に休みというのが腹が立つ。U町にダイエーが一昨年くらいにできたので45分かけてそこまで行く。そこだと夏は夜の9時までやっている。冬でも8時ぐらいに閉店なのでは。平日はN町のスーパー。

生協はC社で共同購入していた。今ではメンバーがそろわなくてできない。魚でも味付きのものがほしいとか、ちょっと変わったものがほしいときに生協はいい。通信販売は大阪にいたときより減った。お金がないというのが大きい。

こっちに来て買うものが減ったのは、欲しいというものに当たらないだけ。いいものがない。車に乗り始めて車にお金がかかる。ここに来る前に免許を取った。

金銭に対する執着がこっちに来てなくなった。食べるものには不自由しないし。

趣味について

以前は鉢植えで花を育てていた。こっちに来てサボテンや蘭（シンピジウム）やハーブを育てるなど、より本格的になった。

農林業（自然）体験

独身の頃は1年に1回くらい山に登っていた（ハイキング程度）。海で泳いだりもしていたし、昔から自然は好きだった。ここに住んでいると山が身近で、話ができるような気になる。主人の両親が畑と田圃で自分たちが食べる分くらいの米と野菜を作っていて、主人は日曜日に手伝っている。C社に勤めていた頃は稲刈りや田植えや栗拾いなど手伝ったりしていた。

つきあいについて

大阪ではママさんコーラスに入っていて、週に1回練習があった。コンクール前には3, 4回の頃もあった。コーラスが仕事のようなもの。

ここでの組のつきあいは強制的だが、月1回の常会に主人が参加するだけ。田植えの時期や苗の購入時期、森林組合のことや道路工事のことについて情報が伝えられる。

公民館の会は体育委員や農業委員といった委員だけが集まればいい。

婦人会は1年に4回ぐらい。楽しくて笑い転げている。ゴキブリ団子を作ったり、ドレッシングを作ったり、焼き肉のたれを作ったり。班長が講習を受けて帰ってきて、それをみんなに広めるといった感じ。こういうのがないと退屈。隣近所でもみんな勤めがあってあまり会えない。隠居すると婦人会も卒業してしまう。70歳くらいまでは出てきてもいいのではないかな。10月の運動会も母屋の人がお年寄りを誘えばいい。毎年人が少なくなっているのだから、少しでも多くの人で楽しみたい。

こういうつきあいは情報源。人の家のことや地域のことがわかる。

広島から来た人で、ハーブ栽培をしているYさんとつきあいがある。

今後のことについて

両親が亡くなったとしても大阪には帰らない。再就職はないし、もう大阪に帰っても落ち着かない。ここの生活は自分に合っている。空気がいいし人がいいし、景色もとびきりというわけではないが、きれいだと思う。たぶん永住するのではないかな。ここに来る前に友達には絶対すぐに帰ってくるだろうと思われていたらしい。今は息子たちにも帰ってこいと言っている。跡取りという意味ではなく、ただ子供に自然に触れさせたいと思っている。安心で楽で健康的。友達にも、みんなに勧めている。2ヶ月に1回は大阪にも帰っている。

14) T. M (S自然牧場・Uターン) ・ T. H (C社・Iターン) 夫妻

現住所：S町

家族構成：夫妻、長女（小3）、長男（小1）、次男（4歳）、母夫について

年齢：32歳（昭和40年10月生）

出身：同上

実家：母親、弟（香川）

略歴：高校卒業後、東京の車内部のゴム製造会社入社（3年間）

異動で広島市内移住（8年間）

実家に戻り、S自然牧場に入社（平成5年～）

妻について

年齢：32歳（昭和40年6月生）

出身：広島市

S町に帰ってきたきっかけ

5年前に父親が亡くなったこと。1年間迷って帰ってくることにした。

1年間迷ったことについて

広島の生活が気に入っていた。妻が逆に「行きたい」と言ったのが大きかった。（夫）

「いずれは帰る」という話は結婚当初からあった。どうせ帰るのなら上の子が小学校に上がるまでに

帰った方がいい。転校はさせたくないと思ったため。29年間広島で、実家のそばに住んでいたため、兄弟や両親と別れるのは寂しかった。(妻)

S町の感想

盆や正月くらいには来たことはある。便利のいいところに住んでいたため、すごい田舎と思った。(妻)

仕事について

役場の税務課の人が知り合いで、その人の紹介。(夫)

C社勤務。パソコン内部部品組立。朝8時半から夕方5時まで。義母が縫製工場で働いていたが、退職したので、女2人家にいても、仕事もないかどうかということになり、働きにでることになった。経済的に収入が減ったこともある。(妻)

収入について

月10万下がるが、そういうのは覚悟の上で帰ってきている。

買い物について

免許取りたてで、U町やN町に週1回行くぐらい。平日会社から帰ってからか、木金土のどれかに行く場合もある。義母はAコープに行く。

本はS町内。近所の人たち(65歳, 34歳, 29歳)と生協も利用している。広島でもやっていたが、ここは田舎だからないと思っていた。珍しい食べ物(お弁当のおかずとか, 10日間持つ豆腐とか)を頼む。免許がなかった頃はよく頼んでいたが、今は3, 4つくらい。

支出について

行事とか出不足金がない。

住まいについて

広島では4畳半, 6畳, 3畳の2DKのところでお家だったので、家賃は2万でよく、駐車場もタダだった。今は1階に自分たちの家族が住み、2階にお義母さんが住んでいる。経済的にもその方がどちらでも楽。

地域の行事、会合について

文化財保護委員をやっており、年間36万の予算を任されている。これは、2年交代。そのほかスポーツ大会もよくあるが、それほど苦ではない。ただ、行事ごとに出費が嵩むのがきつい。年間35,000円は払わなければならない。この前も11月3日に鹿踊りという祭りがあって、そのためにいくらか払ったばかり。2ヶ月に1回は何か行事があって、お金を払っている。それ以外にも山の持ち株制があり、集落全体(大字単位)で持っている山と、集落の中の上と下(小字単位)がそれぞれ持っている山があるのだが、父親が持っていたのが全体の山の持ち株で、年3, 4回施業(下刈りや枝打ちなど)に参加しなければならない。それに参加しないと出不足金として、1回につき7,000円払わされる。昨年は全部参加したが、今年は参加できず支払った。父親の時代には配当はあったのかも知れないが、今では株を持っても何の利益もない。支出ばかりのような気がする。

リーグのソフトボールの試合もある。こういった行事や会合には、自分が部落の大役を任せられたときのためにと思い、参加する。メリットは顔を覚えられることと、何かあったときにいろいろ相談できること。相談するのは同世代から10歳以上上の人たち。

それに、消防団、地区別運動会、総務区長杯や区長杯のバレーボール大会などがあり、やりすぎ。もう少し減らしてもいいと思う。昔からずっといる人は比較的積極的で、外に出た人は抵抗があるようだ。意見としては半々といったところ。(夫)

婦人会やバレー大会、運動会等に参加している。婦人会は部落の行事の準備をしたり、新聞を作って配ったり、ラップを売って利益を得たりした。行事ごとが多くて面倒くさいと思ったが、人から言われるのが嫌だから、最低限出るべきものは出る。(妻)

友人について

高校はN町だったのでS町よりもN町の友達が多い。(夫)

広島ではマンションの下で公園で子供を遊ばせていたので、近所の人とは友達になった。

高校の時の友達など、学生時代の友達もいた。今は年賀状を出したり、夏、年に1回集まったりしている。最初は電話ばかりしていたが、今はこっちにも友達ができたのでかなり減った。こちらでの友達は、同世代のお嫁さん、子供の学校の友達のお母さんや、部落の近所の人、会社の人になる。(妻)

時間の使い方について

広島では午前中(朝10:00~12:00)はマンションから下りて公園で子供を遊ばせて、一緒に子供を遊ばせている近所の奥さんたちとそのままお昼ご飯を食べて、夕食の準備をして夕方からまた遊んだりしていた。ここには公園もないし、同世代の人とは家が離れている。散歩しても人と出会わない。慣れたら別にどうと言うこともないが。今では義母がご飯の用意もしてくれるし、楽ではある。(妻)

メリットについて

年輩の人とつきあうことが多いので勉強になる。運動が好きなので、バレーボールで体を動かせるのはいい。今まで会社のチームで週1回やっていたが、今週から部落の地区のママさんバレーチームに所属することになった。ここだと試合もある。前から誘われていたが、一番下の子が小さいので断っていた。義母が下の子を見るので行っていいよと言ってくれ、入ることにした。(妻)

教育について

N高校も2クラス減った。10年前と比較して倍率的に今の方が厳しい。ダメならU高。そこだとバス通学になる。

勉強は人についていける程度でいい。のびのびと優しい子になってほしい。(妻)

人の道にそれるようなことをしない。3人ともS町に残ってほしい。いったんは外に出てもいいが。ここにはまだ開拓するところがある。都会にはもうないのでは。公社内で出来れば一緒に働いてほしい。特にハム作り。(夫)

農業について

両親が趣味でやっていた。(母親が今も続けている。)(夫)

最初は手伝っていたが、したことないので鍬も持てない。新鮮なものが食べれるし、いいと思う。何をどう作ればいいのか、今教えてもらわないといけないなとは思っている。

I・Uターンについて

にぎやかになるのはいい。Uターンの人は地域のつきあいもそこそこできるからいいが、Iターンの人は難しい。地域の行事に参加してほしい。(夫)

現在の目標

ハム・ソーセージの製造技術の向上(夫)

仕事上の不満

土日は当番制でやっているのだが、女の人からはそれから外されて、大体メンバーが集中すること。週休2日でいろいろ融通が利くようにはなっているが。(夫)

仕事後、休みの日の過ごし方

趣味は釣り（海）。子供と遊ぶ時間は逆に減った。何か行事があれば夜の8時～10時はそのための会合に拘束される。

町から話があり、町の補助でグリーン・ツーリズムの研修のためにヨーロッパに行ってきた。ドイツ、スイス、フランスに12日間の日程。昭和58年から町がグリーン・ツーリズムに力を入れている。（夫）

グリーン・ツーリズムについて

ドイツの南の方でハイデルベルクのゼーバッハと、ほとんど観光でスイスのベルンやチューリヒやアルプスをまわって、フランスのブルゴーニュ地方のレナウト村に行った。ドイツ以外はほとんど意味がなかった。ドイツで本場のハムの味を知るとというのが、目的だったから。ハムとよく一緒に出される、ザワークラフトの作り方を教わったが、そこは緯度が樺太と同じだから、ここでそれを作っても腐ってしまう。S町は現在その缶詰を直輸入している。S町が建物等モデルにしている村も、どうやって人を呼び寄せているのかを見てきた。研修旅行は県の振興協会主催（去年は福祉の海外研修だった）。男女合わせて21人でまわった。新居浜、久万、柳谷、内子（2人参加）、一本松などから来ていた。グリーンツーリズムはいいこととは思いますが、ヨーロッパは農家中心なのに、日本は役場中心。S町は観光客も17, 8万来ている。内子が60万人来ているらしいから、そのくらいまでいくといい。

将来について

ホームステイならやってもいいが、グリーン・ツーリズムのようにいろんな人を家に泊めるというのは抵抗がある。ハム・ソーセージの製造技術を高めると言っても、ドイツ人のマイスターが言うには、ドイツ人でも10年はかかるし、まして日本人には体力的に無理らしい。大洲経済連でもハム作りをやっていて、そこで働いている友人がドイツに研修に行ったら、半年で10kgも痩せて帰ってきた。ハムだけでなく、それに合う料理作りやハム製造の機械の修理などいろいろこなすべきことが多いようだ。S町のハム工場もスイス製1台とあとは全部ドイツ製の機械を導入している。（夫）

役場について

企画課と農林課しか関係ないので知らないが、Uさんの存在は大きい。（夫）

15) Y氏

現住所：K町

年齢：34歳（昭和38年11月生）

家族構成

妻（28歳・K町・農家出身）長男（1歳）次男（0歳）

父（60歳・農林業）母（56歳・農林業）祖母（82歳・無職）

妹さんもK町在住で、短期的に農業を手伝っている。

略歴：高校林業科卒業後、高知の営林局（国家3種公務員）に勤める。（4年間）

徳島で集材の機械オペレーター（半年）

岡山で中古車販売（2年間）

K町に戻り、ゴルフ場でバイトをしばらくした後、（株）林業会社Iに入社。（2年半）

I社を退社後、農林業（自営）経営に従事。

Uターン前の仕事について

高知では農水技官として国有林の管理の補助的仕事をしていた。収穫のための山の材積や販売価格の計算。それ以外には治山砂防堰堤の関係の仕事など。辞めたのは、人間関係はよかったが、高卒で先

は見たから。所長の奥さんが内職をしているような状態だった。がんばってもあの程度という思いがあった。仕事自体はおもしろくなかったわけではない。ただ、公務員は書類ばかりでばかっていると思った。K町の林業はもっと集約的。規模は違うし、場所も違うから施業の考え方が全然違う。こんなんでいいのかなという考えもあった。

徳島の仕事は営林署時代の友達の紹介。最初はいい仕事はなかった。職安に行って見た中で、一番金よかった。若かったしそんなに考えてなかった。次の職場のためのアルバイトといった感じ。

岡山の仕事も徳島で知り合いに誘われた。中古車やの責任者の人。車を並べて売るとかやり方ではなく、直接売りに行き、売ったお客さんにまた、客を紹介してもらい、マージンを払うというような、客を組織して使うやり方が、見ていておもしろいと思った。自分は客だったし、自分も客を紹介したりしていた。都会に出てみたいという思いは多少あったかもしれないが住むところにあまりこだわったつもりはない。仕事がおもしろそうだったし、やったらやっただけの収入があるところだったから。自分を試してみたいという思い。たまたま知り合いがいたから。

K町に帰ってきた理由

親が年を取ったし、長男だったし、いつまでもふらふらしているわけにはいかない、いつかは帰らなくてはというのはあった。仕事の方もセールスならよかったが、サービスにまわされた。人当たりがいいというので苦情（クレーム）係というようなフロントにまわされ、給料は変わらないが、仕事はきつかった。（辞めるのに）ちょうどいい機会だと思った。高知に行ったのも一度は外の飯を食おうと思ったから。全然外の世界を知らずに、親父の仕事を継ぐのはどうかと思う。

仕事について

< I社に入社するまで >

ここにいないかという思いはあったが、仕事（カントリーのアルバイト）をしながら、農業はできるかなという考え。ここにいる若い人はほとんど兼業。

< I社について >

高校に遊びに行ったときに恩師から勧められたのと、助役からも話があったのがきっかけ。

I社の賃金仕事は会社の方針だから別に不満はなかった。ただ、せっかく資本金があるのだから、山でも買って転売していけばいいのにと話があった。K氏（営業）に任せておけば、もっと利益が上がるようにできたのに。役場が口を出さずに。

公務員時代は日当で、月30万もらっていた。I社は単労職並み。それに現場手当が付く程度。自分は経験者でもあったのだから、それを考慮して後15万は上げてほしかった。

人間関係については同僚とは仲良くやっていた。管理職という役をもらったから、下の意見は上に言わなければいけないという思いがあった。上司というより、役場と意見が合わなかった。また、家の事情と平行線。

< 自宅の農林業を継ぐきっかけ >

（K町に）帰ってきて帳簿を付け始め、経営体系がわかってきた。自分が入ってやってみても収益が残ることがわかった。I社にいるよりも十分な収入が得られる。百姓は元来井勘定でいい加減。これまで（税など）取られてきたから、隠そう隠そうとする。儲かったという話は絶対にしない。江戸時代から虐げられているせい。子供にも言わない。帳簿も付けず、貯金通帳を見て喜ぶ程度。帳簿を付け始めたのは、K町に帰ってきてすぐ。税金をかなり取られると言うので、帳簿を付けて申請することにした。そうすると意外と安くなった。元々数字には割と強かったし、公務員や民間で働いた経験

は役に立った。

<農業について>

農地は250a。田圃が2haでトマトが35a。トマトはK町のトマトが有名になった頃から（約20年ほど前）親が始めた。規模（帰ってこれる）がしっかりしていた。自分が帰ってきてからまた規模が広がった。最初は稲作が中心。親が、木を伐りに行ったり、採石に行ったりと山師みたいなこともしながら、やっていた。最初は兼業だった。徐々に田畑を買って規模を広げた。祖父がK町内で大工をしていた。戦後大工をやめて帰ってきて土地を買い始めた。だから、先祖代々百姓というのではなく、自分で3代目になる。

規模的には自分が高校の時からやっていけた。数字にしないとぴんとこなかった。普通のサラリーマンなら40代後半にならないと得られない収入。いいときは年収2000万。経費を引いて1000万ちょっと。割合は8割がトマトで、2割が米、1割が山。

他の後継者も帰ってきてやれないことはない。少ししんどいけど。朝早いし。トマトだけなら30aもあれば十分帰ってきてやっていける。ただそれだけでは少し不安。トマトなら米も余分に作れるからいい。

今パソコンをやっているのは見聞を広めるためで、産直は考えていない。会社経営のように従業員もいて生産から販売までやるならそこまでできるが。K町のトマトの場合も、農家は生産だけじゃないと回らない。選果は選果場、販売は農協と分担して量が出せるようになった。農協が大きな会社のような役割をしている。量が量だけに個人販売はかえって配送等のことを考えても大変。O町で個人販売をしていた人もいたが。個人でやろうと思えば資本がかなりいる。会社を興してもスケールメリットが少ない。規模を大きくしたからといって収入が上がるわけではない。機械をまとめて購入するのもいいのかもしれないが、なかなかできない。

現在田を何町か作ってあげたりして、請負もやっている。需要があれば考える。やらなければいけないと思っているし。機械も購入して徐々に。ゆくゆくは人を雇うことも考えている。ただ今はこの規模がぎりぎりいっぱい。理想は自給自足。

<林業について>

I社に山仕事を依頼することはない。個人的に後輩に頼むことはあるが。1人でできるような状態にしている。賃金まで払ってやってもらうような仕事はない。頼むのは1人ではできないような、機械を使って木を引き上げたりすることぐらい。自分が元気なうちは、その必要はない。

収入について

収入は後からついてくる。農業は体を使えば使うほどいいものができる。忙しいときは朝の4時半から晩の7時まで働きづめ。他の仕事もそれなりに努力しないと収入がない。セールスマンをやってみて、半分だましだと思った。どうぞまかして売るかということに、良心が痛んでいた。それに、何も生産しない。やってみないと分からないことだが。やっぱり山が好きだったという気もする。しかし、いつトマトが悪くなってやめてしまうかもしれない。公務員が一番楽してお金をもらえていいかもしれない。

支出について

飲みに行く回数が減った。が、かえって経済的に余裕が出てきたので贅沢になった。

資格について

岡山の中古車屋で働いていたときには、損害保険のセールスの資格を取った。車を買うには保険はつ

きものだから。会社としてもローンにまくり込んで売った方がいい。保険の実績も上がるし、車の付加価値がつく。

I社では林業技能作業士の資格を取った。これはI社に入社すれば、研修に行っておくことになっているもの。林業架線技師、フォークリフト、はい作業、玉掛け技能、移動式クレーン、車両系建設機械の技術に関して、資格を取得した。

住まいについて

元は祖母の家で食堂だった所。3年前から住んでいる。現在祖母は両親と暮らしている。両親宅は近いのでいつでもいける。子供も小さいし、当分は別居。

国道沿いで立地はいい。(車で)松山に出るのに20分で、K町内に出るのも15分だから、あまり変わらない。

買い物等について

週に1回くらいは松山に行く。食料品はK町で、病院等は松山。

趣味について

<パソコン>

高知にいたときから、趣味で始めた。(それまでやっていた)アマチュア無線の延長。職場で面積計算をしてみたいというのはあったが、まだパソコン自体普及してない頃だった。

パソコンで引き出す情報は、農業フォーラムが多い。Iターン情報もある。「お百姓になりたい」とか。Nifty - serve の情報量が多い。しかも月2000円もいかない。インターネットはまだまだ。インターネットみたいに開けるのではなく、ダウンロードで落としていけるのでためておける。みんなが書き込んだもの(チャットコーナー)を見て、参考にしたりしている。落とすだけなのであんまり時間もかからない。暇なときに見れる。

今回(田圃の)川に橋を架けるために、県に申請する書類に面積を書くための方法を教えてもらう。青年農業者の協会の集まりに、1時間かけて行って、30分で終わるのを考えると、こういうので済ませればいいと思う。会で知り合った人とメールで意見交換というのは、今のところ、向こうが(パソコンを)持ってなかったりしてできないが。役場に提出する書類もこういうので済ませたい。改良普及所はパソコンが充実している。専門的に教えてもらったのは林業試験所の人。I社に勤めていたときに知り合った。

インターネットは中途半端。Nifty 同士なら相手が受信したことを確認できる。ソフトもたくさんある。簿記ソフトのフリーソフトもある。早いし間違えがないし、チェックしやすい。グラフにもできる。

<柔道>

今、週に1回教えているが、父兄からの要望で週に2回になる。子供を教えるのは難しい。30人くらい生徒がいて3人で教えているから大変。昨年からはじめた。たまに高校に行って高校生に教えたりはしていたが。今柔道の会長をしているので、なんとか子供たちの柔道をやってくれと頼まれて、やむにやまれずやっている。5年間柔道教室がなかったのだが、昨年復活した。K町内の子供の数も大分減っているの、その中で30人は割合として多い。O地区の方にもう一つある。

地域のつきあいについて

青年農業者連絡協議会、柔道の会、公民館(M地区で一つ)の運営委員会に関わっている。青年農業者連絡協議会は13人。このうち専業は2、3人。あとは農協職員や役場職員など。一応35歳以下とい

うことになっているが、実際上限なし。公民館は敬老会や、運動会、文化活動などの運営について集まって話し合う。小さな祭りは組単位でやっているが、公民館はもっと総括的なことをやっている。会のかけ持ちはどうしても起こる。夫婦で参加するのは飲み会くらいで、あとは一人で出る。こういうのが都会にないのはうらやましいこともある。何かあったら「若いもん」といって声がかかる。うっとうしいこともある。手間をとられるだけ。これに参加したからと言って地域に対して意見が言えるというのでもない。行政や公民館には直接言えるし。よく知っている人だから逆に言えないときもあるが。公民館も大したことはしてない。運動会とか農業祭りとか。参加者は少ないが、昔からの行事のためやめるわけには行かない。人づきあいに悪いことはない。頼み事がある場合もあるし、情報も入るし。時間的に余裕がないから困るだけで、人間関係としてはいい。ここに住んでいる以上はしょうがない。道を田圃に通させてもらうとか、仕事をする上で必要。農業をやる上では水の問題があるし、林業も人の山を通らないといけない。そういうことでちょっとでも知っていれば話もしやすい。

暇な時間の過ごし方

農業は何でも自分でやってしまう。家の修理から機械の修理もやる。だから暇な時間というのはほとんどない。やりたいことはいっぱいある。パソコンのソフトを使いこなしたいとも思っているし。実際はなかなか。もうちょっとゆっくりできたらというのはあるが、不満と言うほどではない。冬は多少暇になるし。

充実しているというよりも慌ただしく1日が終わってしまうといった感じ。

結婚して子供がいるというのは大きい。若いうちは1回一人暮らしをすべき。自立しない。親に頼ってしまう。昔のように大家族ならいいのかもしれないが。

K町の自慢

四季がはっきりしている。涼しい。松山は暑い。(岡山にいたときはそんなことは思わなかったが。) 冬は雪があった方がいい。

Uターンについて

ここにいる若い人はほとんど兼業農家。職場は松山の場合もあるが、ほとんどK町で、役場や農協に勤めている。高卒後こっちの職場に勤めて家の手伝いというパターンも多いが。同級生の高校林業科40人はみんな外に出た。今実際残っているのは、Uターンも含めて、高校の男子100人中10人くらい。林業科40人中3人くらいしか林業関係の仕事をやらない。家に山があっても山では食べていけないから。K中では100人中男子が50人くらいで残っているのが10人くらい。その内I社に入ったのが、自分を除いて2人。

高校林業科について

I社も高校の林業科に固執することはない。林業科は普通科に入れないから行くという感じ。小さい頃から山仕事を手伝っていたから、自分は普通科に行かなかったが、林業科に入ったとたん、優等生になってしまった。かえって普通科の方が(I社にとって)よかったりするのでは。子供のとき手伝いはしていたが、親に進路に関してとやかく言われたことはなかった。自分も子供に対して何も言うつもりはない。お墓だけは見てもらいたいという気はする。

高校で得た技術はどうせ使えない。中途半端であまりいいイメージを林業に対して持たないということはあるかもしれない。きれいな服を着たりしたいときに作業服を着てやらされるのは嫌かもしれない。大学に行ったら考え方も変わっていいかもしれないが、高校生ではどうか。林業は仕事として魅力がないのでは。中学生が山でチェーンソーを持って働くような仕事をやってみたいと思うのだろうか。

木工作業ぐらいで済ました方がいいのではないか。昔は（林業科の中で）林業，木工，農業と別々だった。今は林産等全部一緒にやっている。

新規就農者について

ゼロからというのはまず無理。行政からの助成があっても土地を買って機械を買ったりすると、もう残らない。500万ぐらいの資本があればまだいい。

平社員として普通の会社にはいるのとは違う。農業公社みたいな所に社員としてしばらく入ってやってみてから、本格的に始めるというのならいいのかもしれない。K町にもそういう法人があれば、そこから人を雇って、個人で農業経営ができるかもしれない。K町だったら農協がそこまでやればいいと思う。ある程度資本を提供して。ゼロからなら5，6年あれば一人前になれるのでは。

何をやるにも資本はいる。喫茶店をやるにも数百万はいる。農業は何もなくてもやれるというような勘違いをしている人が多い。林業ならI社みたいな所に入るとかすればいいが。農業でそういう雇用は、請負でやる人がいないからできない。周年じゃないし。

Iターンの人でも林業はそういう意味ではやれる。

林業は放っておいてもいいのではないか。柳谷の林家の息子で10代の子（普通科卒）が希望を持って林業をやっている。なんとかやっていけそうらしい。人がいないから自分で好きに植えられる。親子でやっている。

K町へのI・Uターン者について

<K氏>

ああいう資本を持ってくる人はいいい。家も自分で建てて、土地も買って。ああいう人なら大歓迎。あここがだけじゃない。一度講演を頼んだことがある。

<T氏>

あの人たちもこちらにお金を持ってきた人。高校卒業後、普及所に行って帰ってきた息子（22，3歳）が、父親の手伝いをしている。去年帰ってきた。後継者の会（青年農業者連絡協議会）に入っている。

I・Uターンの人が増えることについて

中途半端な人が増えてもらっても困る。補助金ばかり使って。しっかり土地を守ろうという気があれば、親が呼び戻す。ちゃんと考えている人はIターンでも資本金を持ってくる。他に仕事はいくらでもあるのだから。自然としっかりした人が入ってくるのでは。資本が入った方がこれからの農業のためにはいいのかもしれない。行政はあまりタッチしない方がいいかもしれない。畜産なんかは法人化もしやすいようだ。外国産のものが入るのはしょうがないが、消費者の意識も変わるかもしれない。農家が我慢して5年ぐらい出荷しなければ、農協にも消費者にも価値が分かっていい。

4. Iターン者の居住形態と居住評価 — 主観的評価法による分析 —

Iターン者分析の重要な局面は、彼らが地域に定着できるか否かである。したがって、分析の視点は、Iターン者がどのように地域とのつながりをもっているかにおかれる。そこでまず、対話式調査結果からIターン者と地域とのつながりに関わる項目を抽出した。それらは「子供の有無」，「結婚の如何」，「持ち家」，「土地所有」，「農地・菜園の所有及び利用」，「役場や町村長とのつながり」，「地域の人々との交遊」に集約できる。

「子供の有無」と「結婚の如何」を抽出したのは、家族がいることによって地域との接点が広がる

という印象を、調査から受けたことによる。また、「家」や「土地」の所有は、本人の地域居住意志の強さを表現していると理解できるだけでなく、地域住民にとっても彼らが「定着の意志」を示していると判断する重要な要素となっていることによる。「農園・菜園の所有及び利用」は、職業としての農業への就業だけでなく、家庭菜園で農業を行うことを通じて地域の人々との接点が生じているとの判断に基づいている。「役場（首長）とのつながり」は、役場や町村長とのつながりをもつことで、地域との親密度が増すと考えたからである。また、「地域の人々との交遊」は、地域の人々とのつきあいに参加し、交遊することによって親密度が増すことを踏まえ、指標に取り上げた。

抽出した項目について、主観的に得点化した結果を示したのが表－1である。得点化にあたっては、まったくない；0点（表では×で表示）、ほとんどない；0.5点（△で表示）、ある；1点（○で表示）、非常にある；2点（◎で表示）とした。

表－2の主観的評価の項目は、やはり筆者の印象に従い、山村居住の満足度を5段階で評価したものである。この表からは、地域居住の阻害要因として、「つきあい」や「地元の目、考え、ムラ政治」「時間」といった項目が強くかかわっていることが分かる。もちろん、初期的には阻害要因であっても、いずれ解消される可能性も示されている。例えばこの3項目にしても、日々の生活を送る中で慣れ、そうしたものだとして理解でき、そして自分のスタンスをはっきりさせて対処するようになれば、これらは阻害要因にはならないようである。ただ、地域社会への反応には、「拒絶」か「妥協」か「名誉ある孤立」、あるいは「積極的参加」の4タイプがありそうである。

以上のことから分かるように、一口にIターン者といっても地域居住志向性には大きな差がある。その差が何から生じているかを検討すると、総合満足得点3点を境に、それ以下では第3セクターや公社などへの就業者を中心とした雇用型Iターン者とでもいえる性格が見られるのに対して、4点以上のIターン者には自営業を営んでいる共通性がある。自営は地域に資産をつくることを意味しており、それだけに地域居住への意思も固いと考えられる。

表－1 地域とのつながりの主観的分析

世帯番号	I・U	居住地	居住年数	子供	所有 家 土地	結婚	農業 菜園	役場 (首長)	つきあい 遊び	計
1	I	奥地	1年	×	賃貸	×	×	○	×	1
2	I	中心集落内	2年	×	賃貸	×	×	◎	×	2
3	I	中心集落付近	8ヶ月	○	賃貸	○	○	○	△	4.5
4	I	中心集落付近	8ヶ月	○	賃貸	○	×	○	△	3.5
5	I	中心集落内	5年	○	賃貸	○	×	◎	○	5
6	I	奥地	3年	○	○	○	△	×	○	5.5
7	I	中心集落付近	3年	×	賃貸	×	×	○	◎	4
8	I	奥地	3ヶ月(+4年)	×	賃貸	○	○	○	◎	5
9	I	国道付近	4年	◎	○	○	△	◎	◎	9.5
10	I	国道付近	夫20年(妻17年)	◎後	○	○	◎	×	◎	9
11	I	奥地	25年	◎	○	賃貸	○	◎家	×	7
12	I(夫U)	中心集落内	4年	○	○夫	○	△	×	◎	7.5
13	I(夫U)	奥地	3年	○	賃貸	○後	◎後	○	◎	4→9
14(夫)	U	中心集落内	4年	○	○	○	△	○	◎	7.5
14(妻)	I	同上	同上	○	○夫	○	△	×	○	6.5
15	U	国道付近	7年	○後	○	○	◎後	◎	◎	7→10
計				15	8	8	18	12.5	15	20
人数				12	8	8	14	11	12	13

注) 得点として◎2点, ○1点, △0.5点, ×0点を各々与えている

表－2 定住における阻害要因と展望による主観的分析

世帯 番 号	待遇	つきあい	役場	土地・家 取得 家賃	都市的機能 (ヒト・モノ 情報・社会基盤)	地元の目 考え ムラ政治	時間	計 初期 現在	総 合 満足度 得 点	定住 意向
1	◎	◎	◎	◎	◎	◎	○	11	1	1 松山に行きたい
2	—	—	—	—	◎	—	—	2	2	2 3年目で決まる
3	—	○	○	○	○	◎	○	6	3	3 ずっと留まるつもりはない
4	○	—	—	—	—	—	○	2	3	3 10年(迷いがある)
5	—	—	◎	—	—	◎	—	4	3	3 98年3月転出
6	—	○	—	○前	—	○	○初期	4	2	4 10年はいる
7	△	○	—	—	○	—	—	2.5	4	4 最低10年はいる
8	—	—	—	○	○	—	—	2	4	4 しばらくいる
9	—	○	—	○初期	—	○	○	4	3	4 おそらく永住
10	—	—	—	—	—	○初期	—	1	0	4 いずれ出る予定(より奥地希望)
11	—	◎初期	—	○前	—	○初期	○初期	5	0	5 おそらく永住
12	—	—	○前職	—	—	—	○	1	1	5 永住
13(妻I)	—	—	—	—	○	—	—	1	5	5 永住(子供にも住んで欲しい)
14(夫U)	○	△	—	—	—	—	○	2.5	5	5 永住(子供にも住んで欲しい)
14(妻I)	—	○	—	—	○	—	—	2	4	4 永住(子供にも住んで欲しい)
15(夫U)	○前職	△	○前職	—	—	—	○	3.5	1.5	5 おそらく永住
計 人数	5.5 5	10 9	7 5	7 4	9 7	10 7	9 9			

また、表－2の結果は、表－1に示した地域とのつながりの合計得点と強い相関をもっている。とくにIターン者の「住居、土地の所有」状況と、「地域の人々との交遊」の強さが地域居住の満足度をほぼ規定していると理解される。

ただ、「地域の人々との交遊」がほとんどなくても、調査対象者番号11のように満足した生活を送っていると思われる世帯もあることから、「住居・土地の所有」状況が最も強い地域居住の規定要因といえるであろう。こうした理解は、Uターン者とその配偶者に共通して居住満足度が高いことから裏付けられる。つまり、自営型Iターン者の究極の姿は、Uターン者に重なってくるのである。その意味で、自営型Iターンは中山間地域での確固たる居住の一つの姿を示していると考えられる。したがって、Iターン者の地域居住施策の中軸は、土地及び住居の提供におかれる必要がある。

引用文献及び注

- 1) この分析結果は、1998年日本林学会大会において報告している。
- 2) 谷富夫(1996) ライフ・ヒストリーとはなにか。ライフ・ヒストリーを学ぶ人のために、世界思想社、4－5
- 3) 中川ユリ子(2000) ライフヒストリー調査。(フィールドワークの技法。中村尚司、広岡博之編、日本評論社)。62－63
- 4) 5) 中川(前掲書)。61
- 6) 中川(前掲書)。62
- 7) Uターン者については、3世帯4人のうち妻がIターンの世帯が2世帯あり、うち1世帯はUターンの夫とIターンの妻2人ともに調査を行っている。
- 8) このような枠組みによる調査・分析結果は「新たな地域居住の可能性－農山村へのIターン者の居住満足度から－」『地域社会と流通システム』(2001)において執筆しているので、参照とされたい。